

二十四輩順拜圖會

俊篇
武殿



寶明題

嗚呼懋哉此舉 聖祖已寂五百餘年其
東關北陸之靈躅赫々乎斯存唯其有
之在人之日睫也披閱焉者雖身未動
座足未踏地猶遍巡拜於彼自為念報
之助此舉實懋哉前篇已上末後篇將
刻乞余一言因卒書冠其端

文化六星次己巳冬十月

浪速

寶明題

印

寶明題

大のむのち

親鸞聖人 御舊跡 二十四輩順拜圖會後篇卷之三

目録

武花園之部

法草御坊
生理の天神の寺
法草の一室
天川山明後寺
築地御坊
瓦王権現の感

法草高龍山報恩寺
御子院の法堂の鐘と土
九辨杖の寺
信玄殿を極善と仰
西光院
御門之御通好
麻生若後寺角力

法苑上人を水の庵と
法を法修へ
龍返の宝剣
瓦子極善の説
おむくける像
恵子山若後寺

以上

二十四輩順拜圖會後編卷之壹

武花園

上野園麻橋より江戸日本橋と
距離二十八里

河州専教寺

了貞撰

○上野より或は下野下総常陸の方へ巡拜する所武花園を序
路は法草の今案に記するに上州麻橋より武花園江府法草
報恩寺へ巡拜し或はより東の方下総より到り後江戸表に出る
築地御坊若後寺等へ系流するの換りと記せり

法草御坊

江戸法草あり通して
法草御門跡と換り

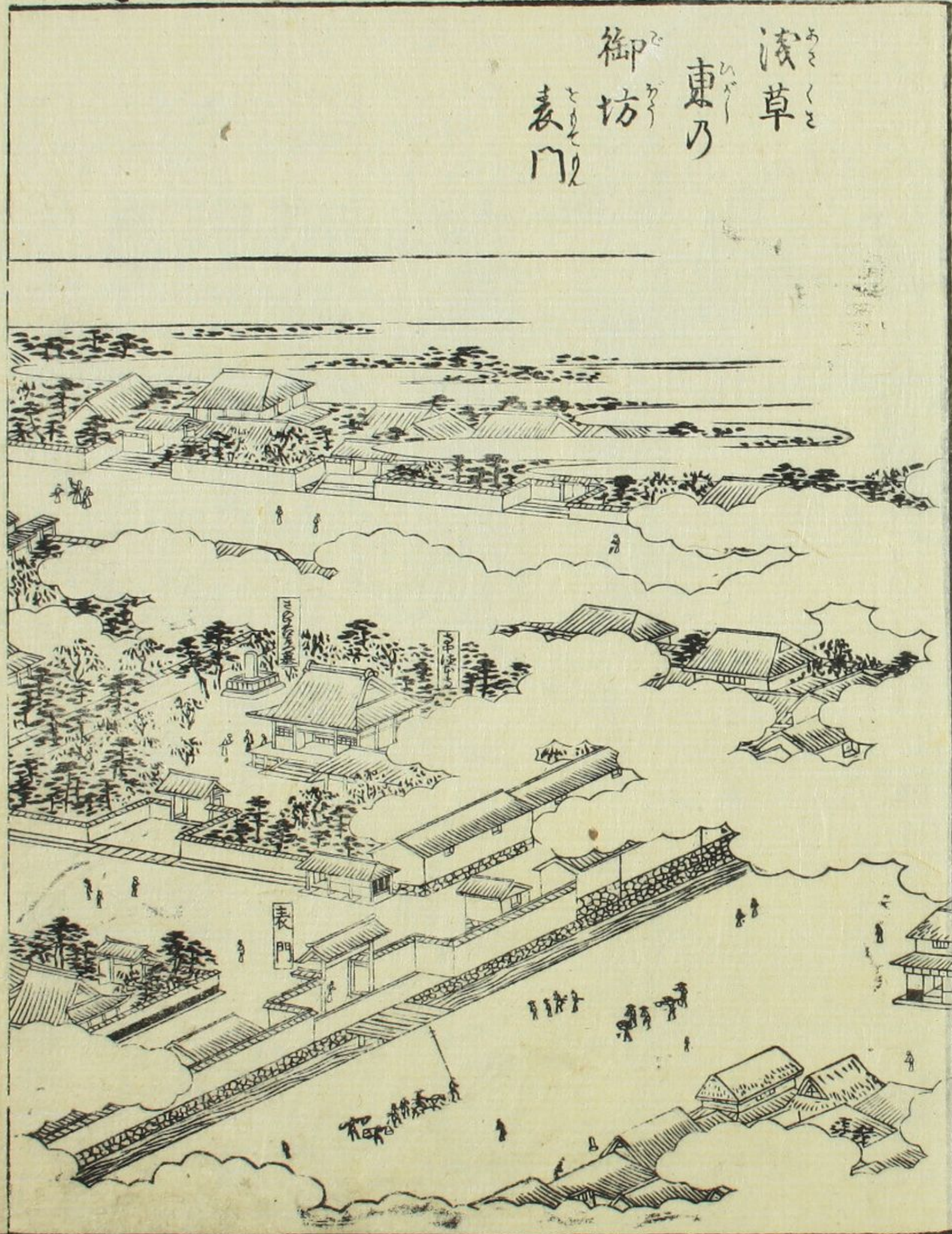
東本願寺御門跡御坊所なり本山より輪番加番の僧
衆を来りしめ

高貴の身は命を伺ひ奉と辨り兼て関東の門末と教示
せしめ終る堂宇巍くししと系師の本山より
○本堂二十八間口面瓦は敷樓右は釣鐘堂正面唐門窓

明治十四年八月十五日 夜赤
 辰歲 五目 大往 生度
 大往 生度

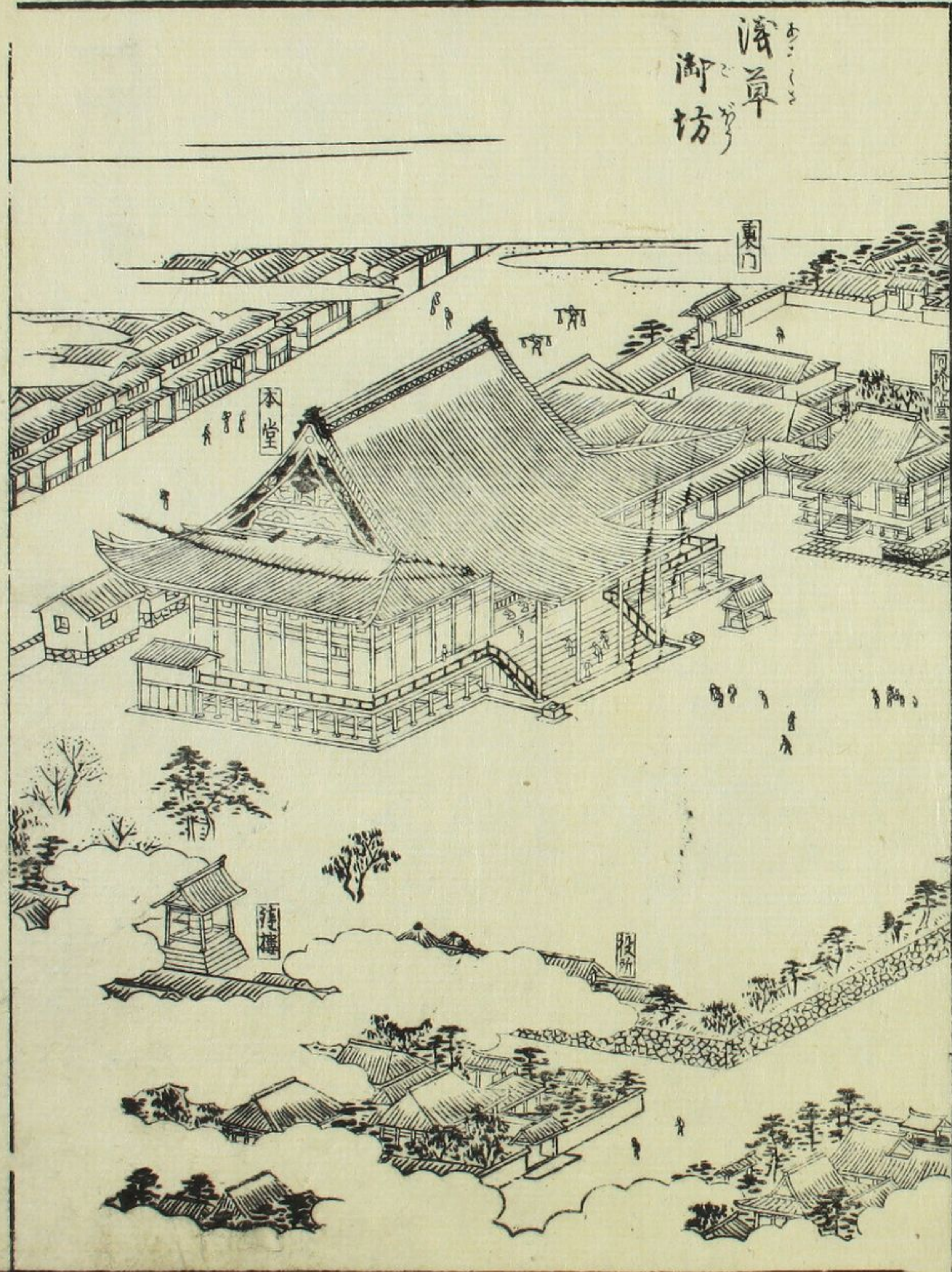
水人の七々

浅草 東の 御坊 表門

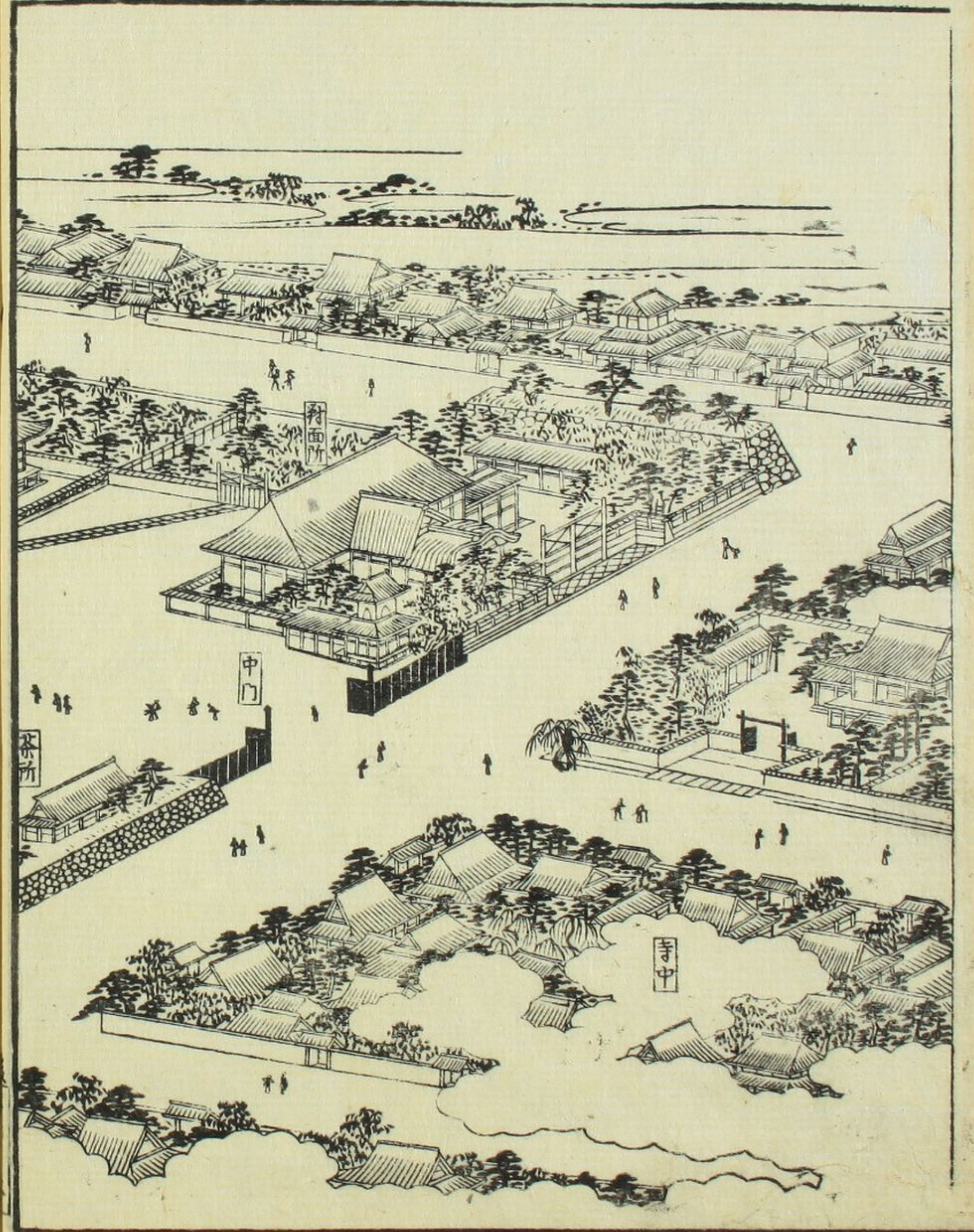


門の内坊舎三十六ヶ所あり。御門に至る府内より世移り時
 の先達御坊より御着列あり門より御登 城成り終り其
 御格式最他より御勝せり
 或は高家より御館へ御巡幸上り増上寺より御佛治りは
 其後の御言國非常と禁より殿より之報恩講御列より御法事
 あり本堂内陣の莊嚴整潔ありて御門より出仕あり
 世移り院家御連枝の位侶内陣の左右より列座あり御堂
 衆列座の僧達より外陣より附座して誦經勸修り終り
 衆僧数百人結界の内より系勸あり其外松殿重なり
 府内近邊の道俗より勿論都て関八州の諸人系詣群集
 あり大堂より溢り度座に充満せり
 其外高家大家並参り候者の出入口並に車馬と連綿

を 上 市 ち

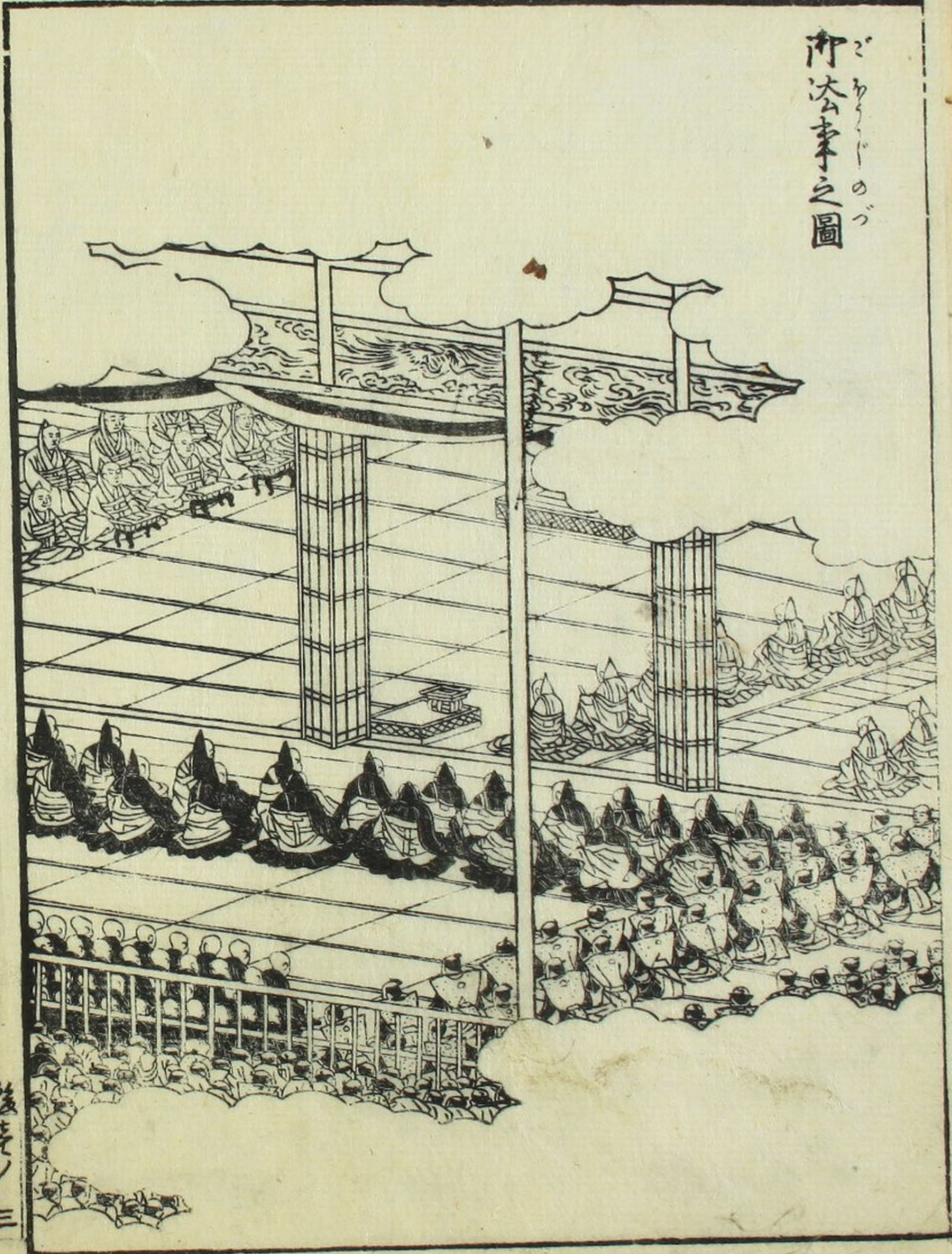


いまがれま
 げんの
 おた
 つけ
 つわ
 専に
 友の
 新島
 浅屋



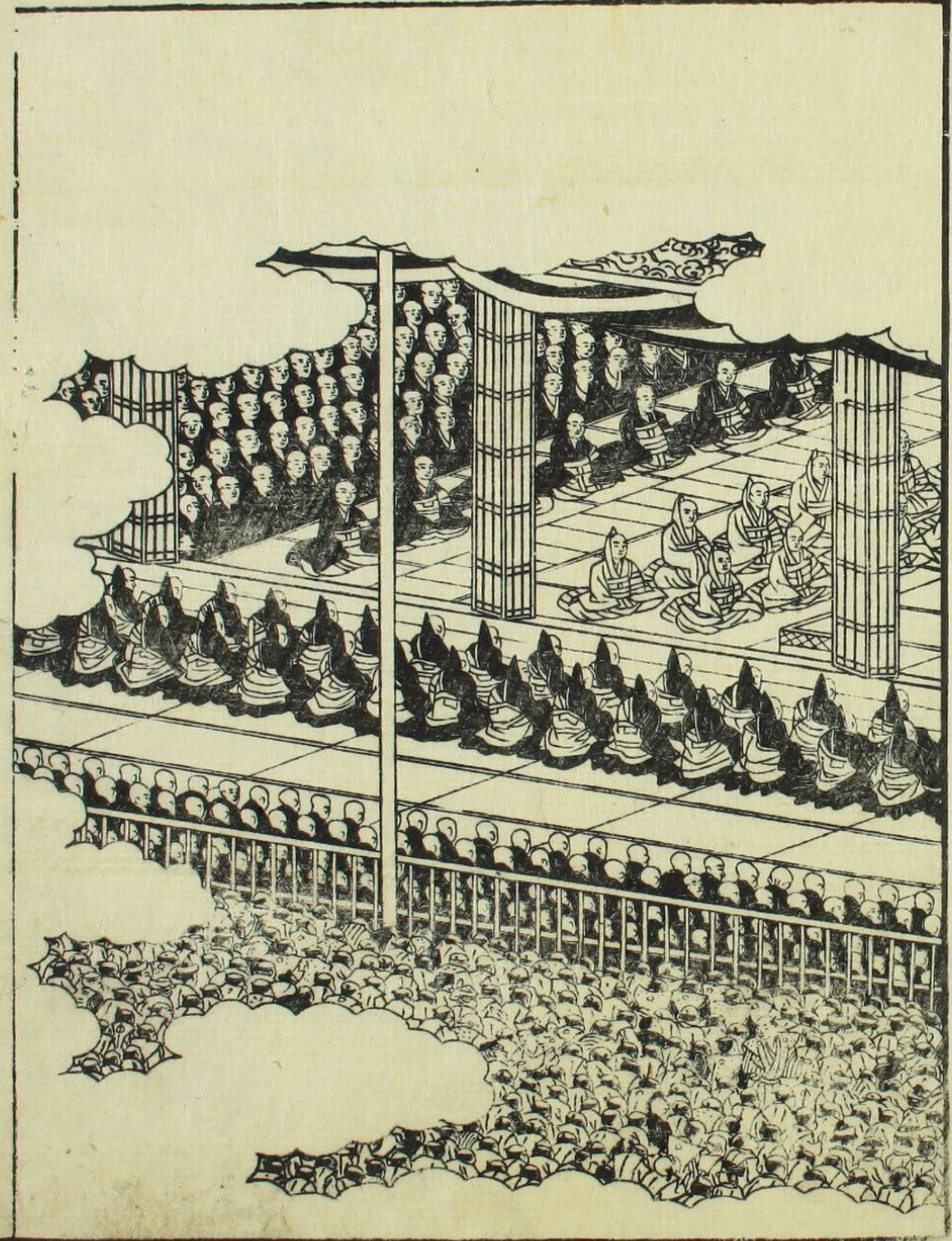
往生
 せとけ
 ますと
 つける
 おろ
 せとけ
 になま
 おまの
 ぶるれ
 のたの
 かとよ
 うとこ
 ころい

ど
 河
 法
 事
 之
 圖

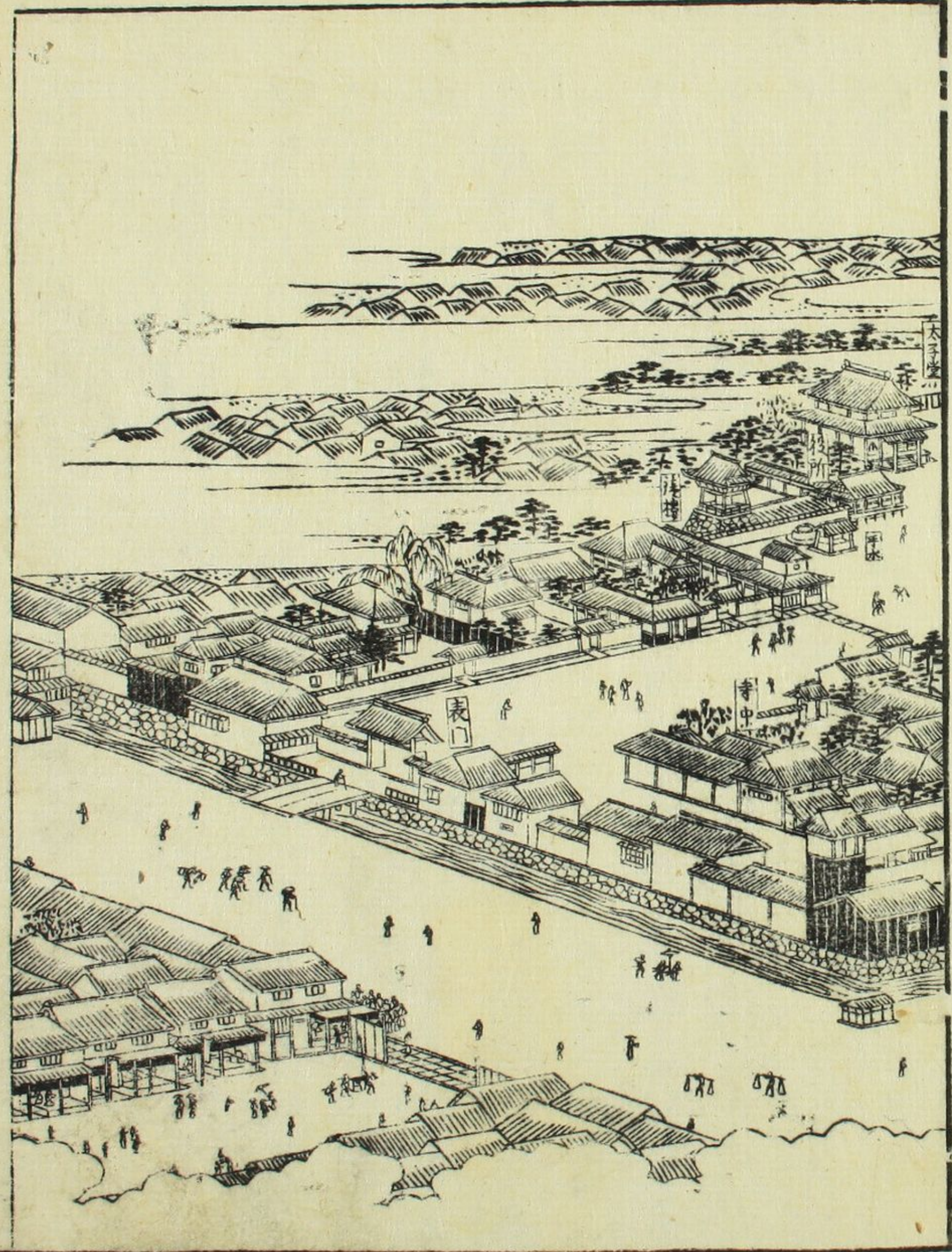


後
 三

下女
 廻り
 こおの
 とき
 いたま
 けて
 みにた
 八
 其後
 おつ
 其由
 きら
 せ親
 子おき



上 大 寺 寺 行



草 高 山 恩 寺



本堂

内町

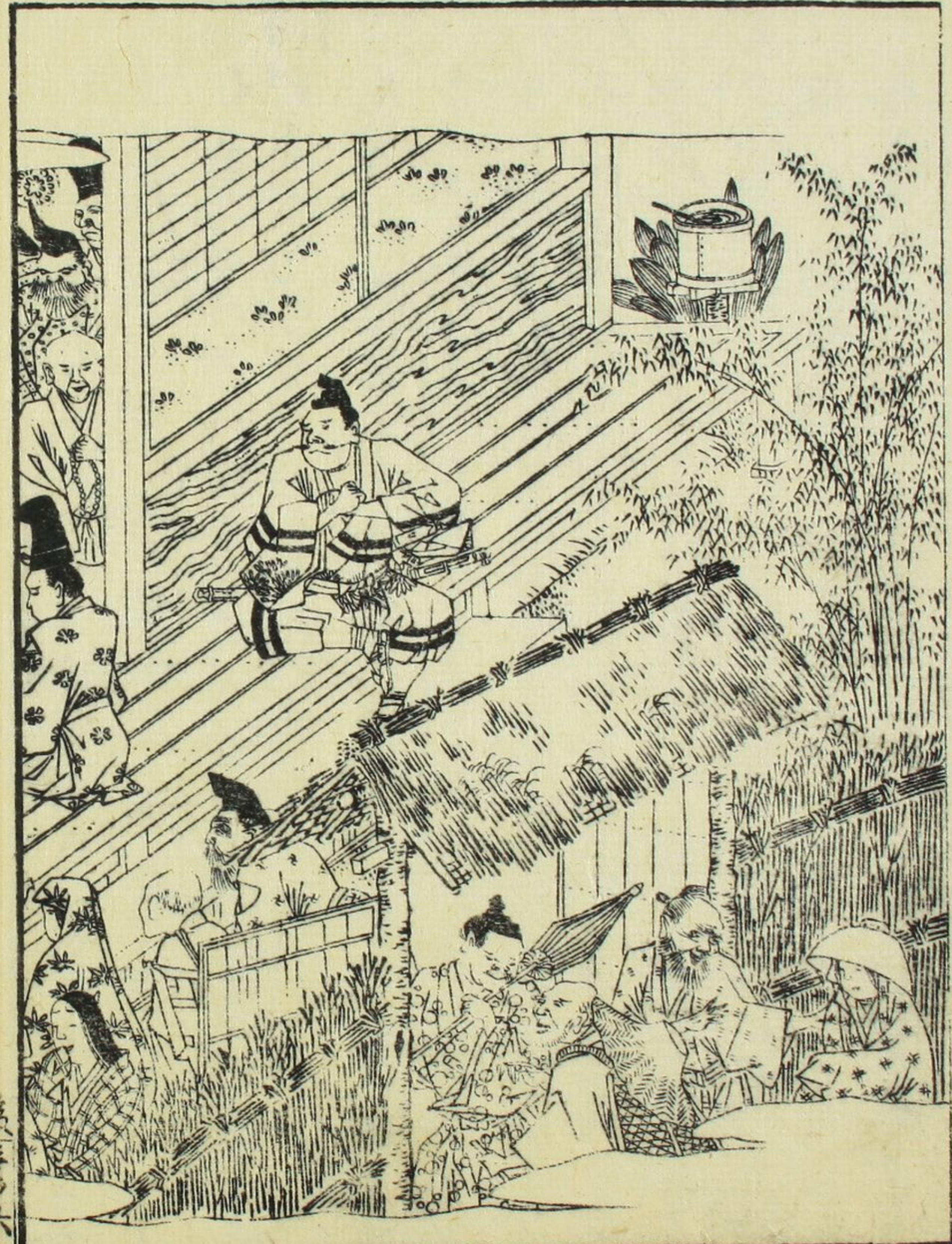
獻上乃音物さるが、堂中又山を築かざり

高龍山報恩寺 東流 院家 日所よみ

謝徳院と稱は堂十二間に面塔中十三坊を子堂より○開山
の性信上人なり抑當院の高祖聖人正足の河内より二十に輩
第一飯沼性信上人の造達也性信上人俗姓の大中呂常州麻
呂郡乃人なり知名の悪入郎と号す 後には即と改む 大力交双勇猛
強勢にして心性狼戾也曾て礼法を不拘順讓の心なき荒者なり
多うが元久二年の春年十八歳より諸國武者修好と志
し國を巡行せしうゆとくして紀州徳理権現より清みで
るふ其入ると都より適東山吉水より系信と其法
就上人吉水の禪坊より於て本教他力の妙要を説せり是孫

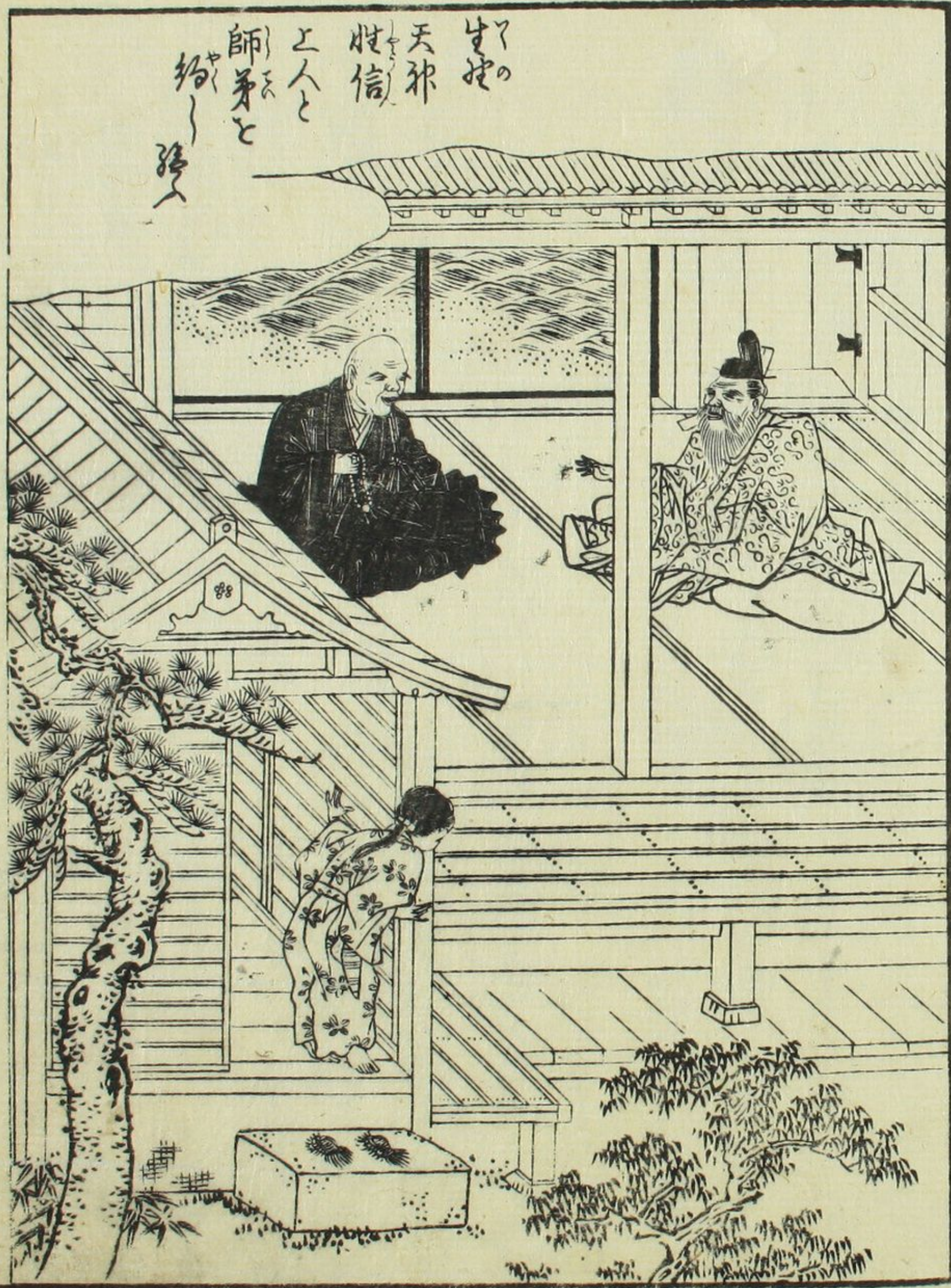
そと

陀羅世の悲観と云ふ十悪の凡夫又逆の衆人も捨てて
救ひ給ふんとし誓ひおれに悪逆の心を顯はし人々
如素の悲観を信しなり一念祿名念佛と云ふ
て彼國より往生せんや又疑ひみんくはとて
化行らせ給ふ徳圃乃美徳道信門前に市とあり維を
ぞたふりぬしよに即振起すなり徳圃は多うが常智の
因今又又於此しよや大師上人の教化ひしと胸を
そよ給ふ難有るとあり多れは後身濟渡るがう上人の
善に出教白く曰く我の東國常陸の者として年来の
いふ物の命を殺し人を惱し悪逆の業に佛法徳
圃の今日が始なり就るふは衆源き我未たりとも
孫陀乃大慈とて救いせ給ふと乃漸教化教を難



信くへ阿のま教りくハ神牙子とあしてくハ悪人をも
化奪はし給りれしと其後磐と代と堅固の信者と
ありにく法統上人に即ガ實ある志を感し給ひ相
世は殊勝たる若者といふ又若信坊渠を神坊乃牙
子に及し能く教化と及し給りく老奉乃源室の相
後入といくむくの年ハ既みせん神坊のいまご年若し
ゆくとい弘法乃力もあるべきも乃ならんとのたまひて
聖人の神牙子と揚りたる 大所上人はまに即とる祖聖人ハ附屬し給ふ
人五二の神牙子とあり岩院終はして開東とあり念佛弘通の
たといくあり給るとるハ神聖人神年三十に歳とに即年十餘 高祖若信
聖人とに即と對し重て他力往生乃有教と稱んごら
承し給ひ則法名と性信と号け給ひぬ毛よりしと性信
坊聖人ハ常法して惜も神側と放たてまらるに配所へ

給き給ふ附も坂東へ立城頼田と居瓜占り給ふと崇と神
牙と附添ひやされたるが其以若建保二年聖人下総
國へ移て神化益はしくたる附齒國を田の庄横曾根郷
中ハ大寺あり年久後毎恒とあり朽坂の古院より毎
誰り被遣を加ふるやうに獲生といふさたり頼多末乃栖
とはかりぬ聖人け荒る伽藍のを殿と乞得たまひ
性信と爰ハ恒院とせしめ十字名号と書して与へ給ひ
是をおるに教化るとしめ給ふされハ性信け寺と被
浦く恒院と専ら真宗を弘通せり 後年同國大なるしと一寺
を祀るに龍宮寺也
建保二年より皇霜十九年を経て聖人神年六十歳
貞永神降洛のうせ給りんとく東國神後足乃お
り性信坊ハ所供や登るまらるが既ハ相州若根山



又七聖人関东の方と詠め申り流し河洞を渡へ仰々々の事
 後関东にありて衆生と化益せしむに偏執邪見の族
 も念佛を信し今も地力往生の教法専ら壯人の係
 治の後のいふる妨げありて安心を私し門系を迷し
 ぬらんと是の悲しむるなりといふ性信汝も奉り
 若より我も改めし化益を受る事既又三十年願
 真宗念佛の旨極に通ずり教く我も代り関东に留り
 門系乃後又弥陀力信心の旨と弘通せば我も流後流
 仕しとんより百信の功なりと異く仰せらばしうい
 性信とてこれ言く洞より全くとみらるが性信如君を所
 弟子と思ふらん心重坦と命じ流るる生後後世乃
 奉りよこそ侍人といふと只く是より別道やさんとの

何なりと悪しくいふも夜の神と教を押し立てさすべしと教
うまうらが師の命に其重きや春ふのどし強て辞せん
悪多し神名残をくくつへし仰え法に東國よと
まり化益と施しゆべしと所受中よとまれば聖人結と
教ひたまひ性信東國又箇りいりのうら親愛が自教
存ぬれば又まゆはし開東の門第一箇又所坊又教けさむ
らふなりともく教く乃什物神製此の抄教ると附屬何
せ給ひしう性信謹て是を拜受し洞と修え聖人又別
と東國へゆりたり備も性信坊下総國撰曾根より
尊修念佛と弘通ありれば道俗皈依系集し門元市と
るに爰又抄ひし性信佛圖と建法いよく宗風と壯ん
よせんともく其地と求むる小幸なり哉飯沼とも廣き江

まき口方の系を志勝とよりとも性信け江派と埋むり
教十町其中又佛圖と管法し都乃聖人へも其教を信
よりまれば聖人甚御疾疾あ門て則寺号と教恩寺と
下し給ふ性信け佛圖又抄ひて弘教真實の教法尊念標
名乃妙業と説弘み給ふ又爰抄る信系信群集し後依
信仰よりなり聖人の此地又禮して教存何せたまふ
矣るし真宗乃繁榮日又ほ壯んこと見えたり
下総國撰曾根と建法し○爰又奇異の事ありて真承元年の
る龍山報恩寺と号しと云
其性信上人け撰曾根乃古院とゆり壹夜化力念佛と教
化にじらる俗法にさし来りて聞法院表せり猶も又壹夜衣
冠うるはしき老翁一人諸人退教乃法に抄り性信上人
と謂して云やういふ上人なりけ泥の傍に立而の生理天神

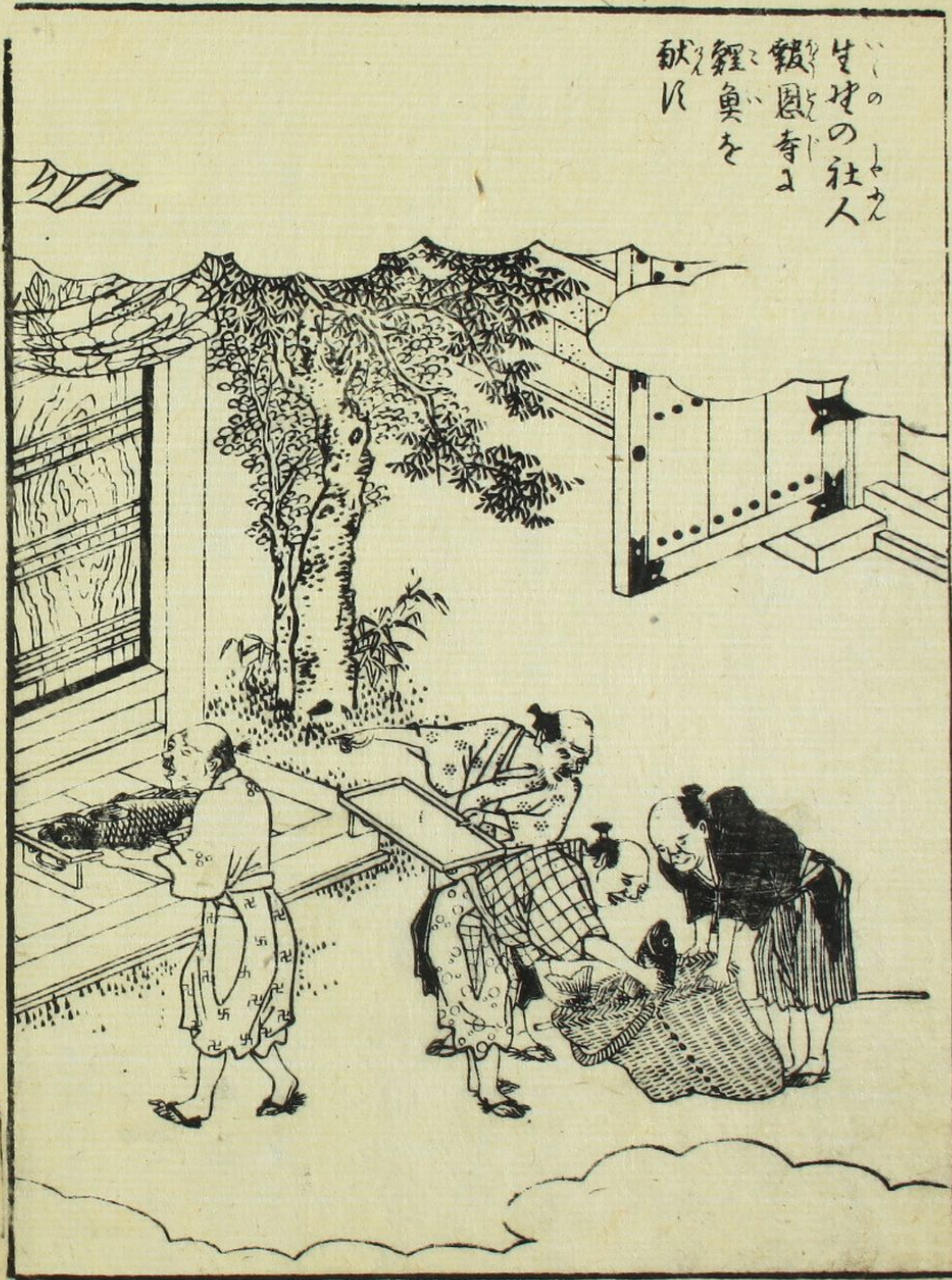


かり師付地と来り弥陀乃本教を説悟し終ふより予も
日夜諸人より来り来て師の教法を傳へる是いと人
手奉之と歎び又終に自今予と弟子と如く終へ予又
河内と師と名ひゆべし我奉靈を祠廟の裡と崇くし
て仮又貌を現し奉るは今より已後の姿と現せ給て
詣り給し於毎歲正月は礼式として鯉魚二尾と鯉
を一是を奉て師弟の印と爲し假令子代を歴ても
爰より予みづらばとて性信上人を拜し出給終ふと見
えしが飛り幻の如く消て見へざり三性信坊音異の事
又名を尋て人より傳へ給後日の音信を待たすいづる
猶も小其翌天後元年正月十日の夜の事なりしが
生現天神の社人以下六人日夜不思議の靈異を以て

蒙りたる其様は天神彼等と告て曰く撰曾根性信上人の
海度利生乃聖者なり予師弟の約と結ぐべきは
師を尊敬するの誌又嘉陽の嘉物としてけ社ありき
今年と始め毎歲定例として鯉魚二献と性信上人へ送る
きん明日河内洗の池に網して鯉魚を獲て撰曾根へ
く献じ給ふべし努め給ひけり遠くはと若給ひたり靈若
を蒙りし社人多く六軍日差と感し吾思感の事いと如
里人より傳へ給へし神勅炳焉と云い等閑と云うべし
彼河内洗の池中へ網を入らば是は夢想と遠くは忽其長二
尺の鯉二献と獲り給へし天の靈と遠くはとけ鯉兩頭と併入
社人多く相傳ひ性信上人の河坊へお系し神勅異
と委しく演説し給へし性信上人安んじ給ひ備難は天神の



生地の社人
報恩寺よ
鯉魚を
献げ



堀りのうら先よけ約諾と蒙りし幸あり是偏又聖人の
神勅化普く濁世末代よ玉門く利物偏増く終ふを
終るん愚凡の我子何として神の師範とみんが思
ふきふあはびとふも米麦の源くまはしませば穽せんのみ
るうくよ思とありさればこれより後神契約と終ひ師
承の禮を受むべき人と彼經典と受納ありと人より獲
餅と一重の經と入来りし屏よ納め天神捧げをてて
送りぬとせ終ひたり是と礼儀の祀と今既又星雲
を極るの六百年一とせも欠るるなり毎年正月神子洗
の池細と入は長二尺の經魚二献被細よりらばとあり
は是正安神の流らしめ終ふ不之とるくも難あり是即
け經と屏よの社人里人これと寄進し今の報恩寺へ送

後
十
三

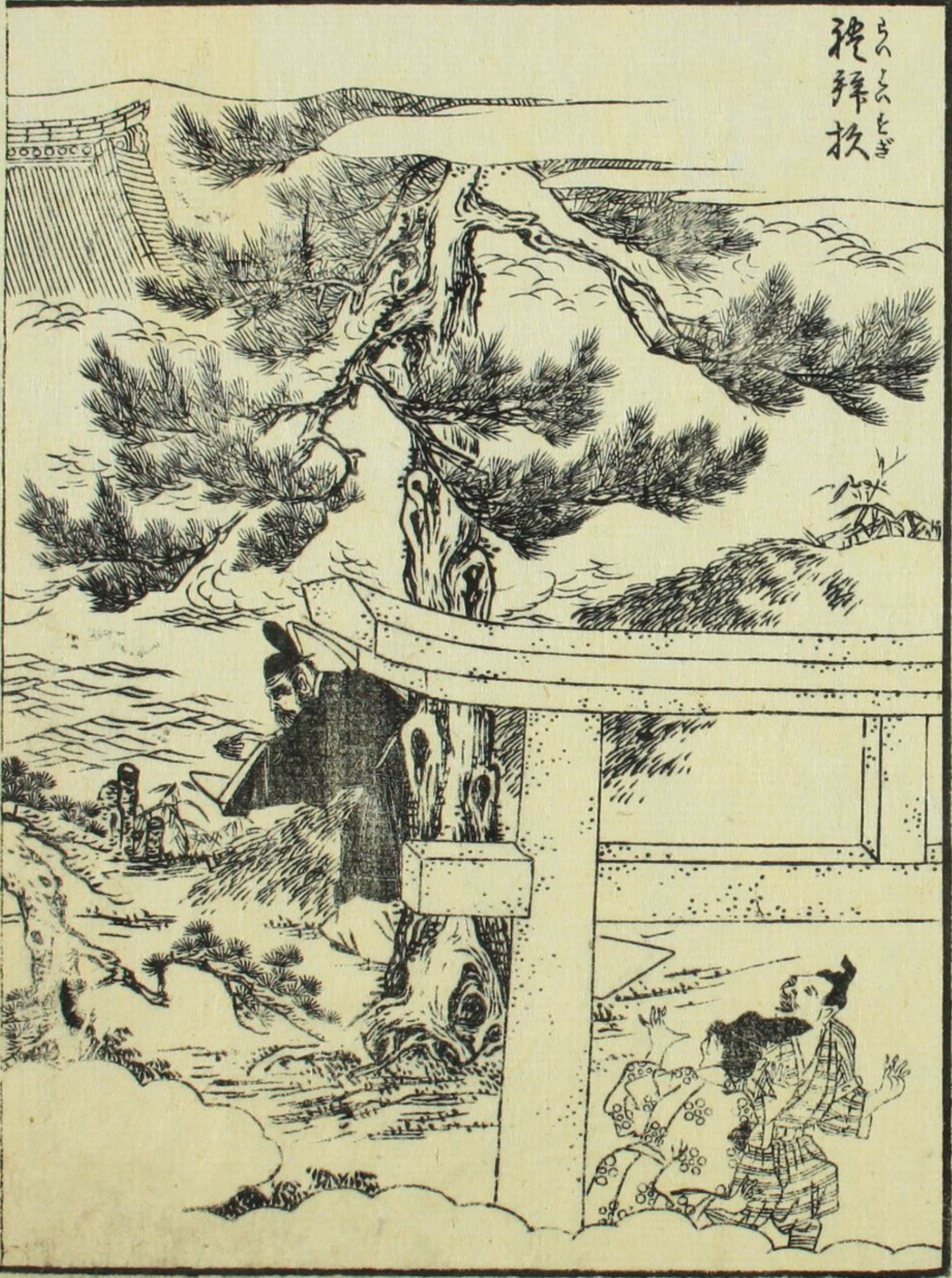
報恩寺と納め例のむく經を入来りし屏へ性
信上人の本像に具へて鏡餅一重を入れて屏し其
生也ていけ鏡餅と天神の禮よと七日傳へり其後
細よとやしく氏子乃者へ与へ侍るとぞ又報恩寺よは
け經二尾ともよ上人の本像へ傳へ是後是とこまよきり
く系諸乃諸人よ与ふり寺例也

○報恩寺百有余年以若多賀谷坊難よよ門く江戸淺草へ引張
り横着根飯沼の古流の圓光寺と号けて今又並帯不とあり
性信上人の本像は横着根圓光寺よのたふた右天神の母より
報恩寺の經と本像に傳へてまより江戸報恩寺へ送りきこは
正月十六日け經典を割て系諸よかつと經用きとも經割とも係ト
て江戸中の門系釋尊し幸ふく剗肉を受る凡六百年の今もこれ
武岡よりまよ小敷いふれ異靈世こそ門くこれをまよ
とむ

○生建の天神の社より寢直と建信一人を載し、社
 社の着たる所を洗乃池の辺り、木の枝ありけ枝の下へ
 毎朝曉天を薫しく夜冠をうけ、静養門て報恩寺の方
 に向ひ暫く礼拝して去る。時より、教年と摩り
 社人始めの種心付りし、が門より見詰めて、思
 ひおびやうふ法に付て降る。石段見ると、れが彼、天神の
 社檀と押用き入ぞと見入ると、矢張りぬ社人、大に思
 是まぐらぐらくるき、神許の性信上人と拜し、終る。あはし
 とくけ枝、又海連を結ひ、也し。礼拝枝と号し、又伏拜と
 稱し、今又出ありそなる。

○傳説、曰く延宝六年の春、天神の別當大生寺病死せり。是
 が其後、僧の僧我強は、報恩寺へ經典と送る。その寺と未寺
 この僧法、又似たりけ、依止りんとく、古例、又背き、洞進の儀なり。

禮拜枝



凡て穢く彼僧の弊病所成の腰矢のてくそは、其の流をよしの
出く正氣を以て、尤も正月下旬をその名に内注する者希く、
姦右清門天祥の靈岩を驚く、その四例のてく、其湯の嘉式、
恩寺の上人は、獻進をへて、天後の昔より、一とせし、
婿を嘉抽する小當年、始めて是と、親の心、叶い、
狂死させんと欲し、そのく、
るく、以て、其の乃、
大に驚き、別當大生寺にて、
浪の池に、
例に、まうせ、
氣し、
知を、

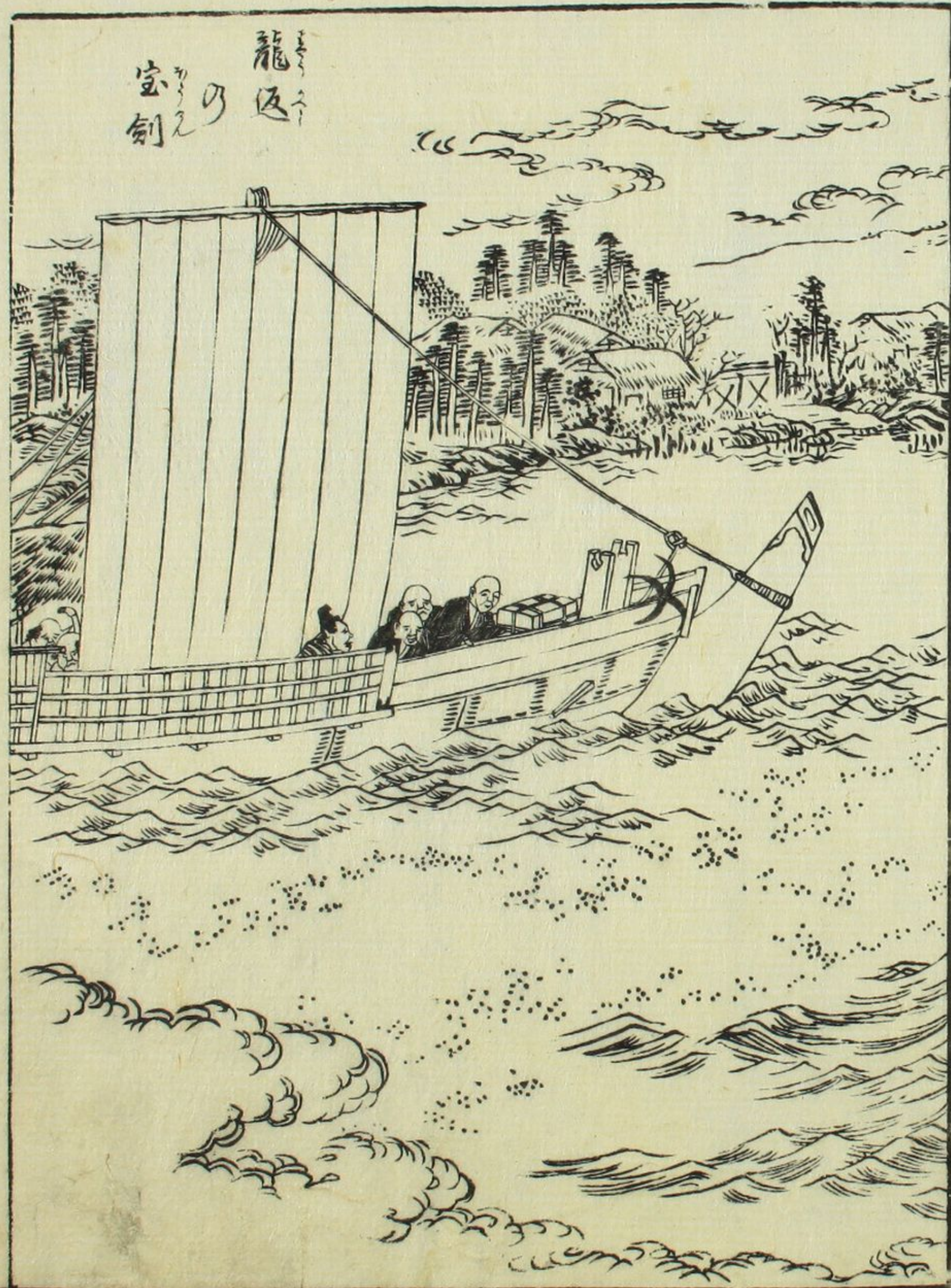
○性信上人貞永元年、より下総國、
真宗念佛弘教、

陸奥、
して種、
一人の化僧、
出湯山、
せうと性信、
とん志あり、
湯山、
松あり、
遠い、
室、
法得寺、
先徳寺、
うまう、

○室、

性信上人
去湯山
茶生の
背そ
拾人





記一壯如信上人。天祚名号る朝親王。六字名号法光上人。六字名号河守。○六字名号龍返寶叔

号蓮如上人。○六字名号後陽成院。六字名号私法之所。○龍返寶叔河守

○又高祖聖人より性信上人へ海附属の什宝丸のごとく

高祖聖人箱根にて河別より河守の中へ種々の宝物。○聖人河珠教河守の勲績を納めて性信上人授け給へ

河圓扇。河刀名地あり。○河巾名地あり。○聖人河真等性信上人へ河附属

の河書二通。○聖人河石持の河茶入。○松尾河茶磨聖人の

河巻鎌倉にて一切経抄考を授け給へ。○河長刀名地あり

○龍返乃宝叔長二寸。寺説曰高祖聖人より性信上人へ附属

の宝刀也性信上人麻呂明神へ信と伝ふる。霞が浦三つの

浦と和して狐の爪は風波雲と化し雷電鳴る。ゆき

和して覆んとし和中の諸人々々小恐と啼叫ぶ。限

は性信上人と云らる。是我懐中の宝叔と龍神得す。歎
とる所か。んと即け宝叔を水中へ投ぐ。ゆきと忽雲晴凡
収めて和を難く。岩岸せり。犹も小下の和中又け三つこと
狐の爪は忽蛟龍形をゆり。上は彼宝叔と裁て和沼に
来り性信上人と是と捧げ。性信希代のゆきゆでゆき龍
返の宝叔と号けゆきとぞ

○或記曰武者修好乃士あり。鞍恩寺の門前。居睡りし

飯沼より悪龍。取て来り。彼者と吾人と。干時士の懐中より

短劍。飛出。これを防ぐ。悪龍。思と。水中へ逃去り。ぬ性信

門内より。これと伺ひ。見け。劍を不承。煮る。煮る。飯沼。みく。こ

入。悪龍を。近出。せり。悪龍。い。け。こ。ゆき。を。道。ま。り。て。常。州。

三つの水中。と。深。ま。い。む。其。後。性。信。上。人。の。息。女。浥。智。比。

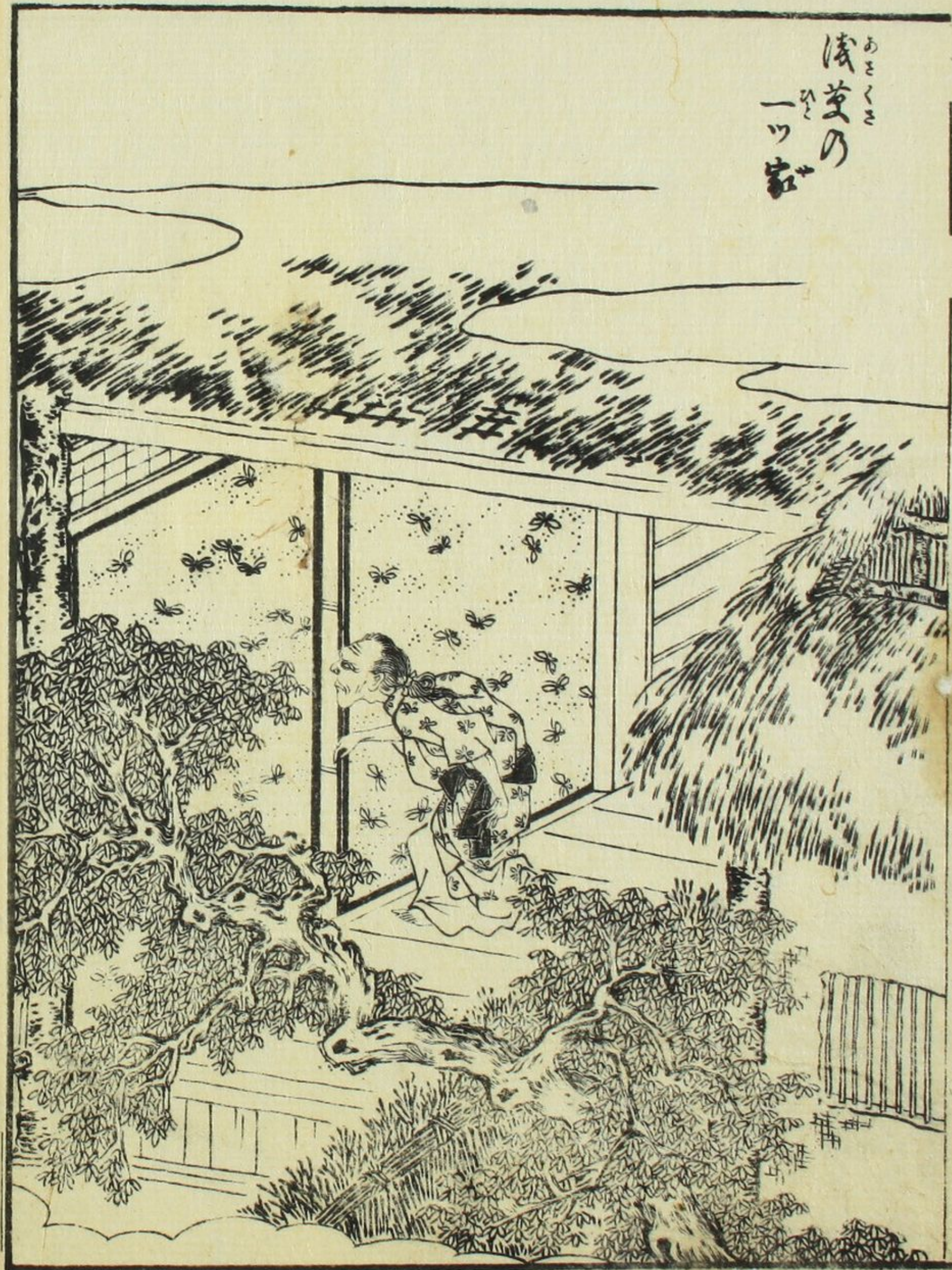
丘尾に細と懐はして彼三又を涉りけるは龍腕は西後らんとれ
まうふ尾の懐中より細をのづろ飛出て水窟に飛入車
流りしに松を門うたり尾海り小再びけりて龍腕改上
細と裁来り尾は返りたは細の名とれと云
高麗竹家秘事あり
本山代より考傳あり

○金龍山法華寺の老僧都波草よりあり本寺の口親善坊舎に十一區入
重宝塔有り推古天皇乃所穿尚寺受刻之が朱葉院天皇入車
平云推古一人武元國司よりし時尚寺親世者の靈異と感し有り
信仰の余り七堂伽藍を造立し回國教多き附せらるる所なり
以未歷代の軍家より修造の儀概し終ひ寺領多し附屬し終
五月十八日親世者の塚日るれば其地の群集するり抄ひしに都牙
一乃紫苑奉朝受取の靈場也
○法華の東に明王院と云る寺あり其地龍ヶ池と云るの裡若くは造
人の住る家居りるく芝生く樹ありる武元院の東よりくは中
一ツ多に老るる婆とすとき年終りる女と只二人住るるがこ乃波

恐しき姫とて初をさるる旅人を止る石乃まうり入るく抄し
う入るる石の穴の穴へ入るる石と海しうけ抄して旅用のもの
衣類と利する客は一人乃旅人の住りし所よりけりてくわる
るに家居りるいりてんとるる不彼ののむるれば旅
人の足とやまき歩ゆるがつりくともるる節の物の長き
客へる旅取とてうけあきけりて和歌を誦し
日ハくまき理にのりともるるる法華寺のいりやのうら
旅人石恩儀のうらまひつとけ婆が家に立入るるをわたりぬ婆
終り入けたるる心よくとては彼石の枕とけりて抄せり
旅人の節の考の歌の心のいぶくを抄りいりて抄ひて
とたししと記出て抄不瓜く何ひる小疾又く彼婆とほし
と候ひ垂てうま至る大石と旅人の枕のりり一高しりけり
とと見く大石抄をさるるまうりせり出二里抄りて
今のよりし不きせり進来りしと一ツの事のみまうりけり
くまどうりける婆よその客誦しけりて天蓋一人破りし
これ法が旧法信する法華寺の親世者より乃其雅と候りて
の著してあせりちりしと云客着てあはれ旅人青笑のそひし
いりく信心肝に命じ親世者の所を瓜回しり唱へ候ふ危き雅とま



あそくま
浅草の
一ツ家



ぬるるねしも彼老薬の積る悪業の子が又我ひ来りて云云
—— 旅人と云ふれごとふ押こち—— 材室衣敷を重し
かども—— 尺御明天皇の御宇三月十日と云ふ年乃記二八
乃其かうら藤—— 三児一人唐織の表と云ふまなひ乃薄につけ
一ツ家—— 名里と云ふむ置るれと見と心乃内—— 心ひは
刺来いくまの縁人と止めぬこと布の衣麻乃袴の外—— 見え
まぬぬの御と云ふたじま—— いちる極分のうら来い推
乃只一人彼が唇は来りたりやと云ふりも誰にかせはしこ娘は出
て終はせ—— せうけ女奉りまご十八の妻秋と終てうら人を掃
る一ツ家に生えぬこと若本さぬ人同乃来うけられは世の
かゝる親優ふむびうらうまのやと云ふし—— せうけうらまのい
かゝる路も云ふと表のこ板乃うらまけうらまけうらまのい
まゝせん

おひあぬ心よりねたがらて涙のちるこい活なりなり
と縁—— 秋の心をさうらうん小疾交るにけ女推兜が所へ又ひへとも
あひ又記さんおの君ゆ人と云ふま—— せうけはうや命のを—— じ
ませ終へしゆりませはけ方と云ふこととが神女と云ふことと
の老を待るの勢うそと石の枕と云ふともまはし—— 表と積ひる

老薬のつらさのみともま—— 尺今の推兜せうけうらぬらんお
ころ—— 衣敷を刺んと例またがま尺大石と雲乃所う枕乃
と—— 情も押落し紙燭と云ふま—— 立うらまはありし推兜何地
ゆ—— やかげもえいとしとせ—— 立うらまはありし推兜何地
私居うら清はし何としてうけ不に御居てけぬまはありける
をやま—— 推兜と道せ—— せうけの娘の娘のいま—— せんて家
乃涙—— せうけも只條の果燕の果燕のいま—— せんて家
非の方へうけ出尾花うきまけと云ふと乱—— ありやま—— 推兜の居
らぬ—— せうけの内へま—— 入る—— せうけの娘と抱とけ交懸をうら
ぬの果や来れまぬ老がぬのたび人乃のうらまをらぬま
ゆへ—— 材室の娘ひうらの料うらうらや今の中—— 地とぬらうら
—— せうけの清ま—— やと表の限り涙うらうら清費て血のうら
は—— 例と非し—— 海きうらうら寝る—— せうけの清ま—— 推兜の
雲と来りし推兜乃正後もぬき出海悪勢と積り須弥うら
るく罪業の清きま—— 滄海も尚及び—— 女の罪業は記—— せうけ
来乃方便我こそ清草寺乃親世をうらうら若し忽令令の菩薩
と化—— 西の方へとびうらうらたまはかとうらま—— せうけの清ま—— 推兜の清ま
と云ふ—— せうけの清ま—— 推兜の清ま—— 推兜の清ま—— 推兜の清ま

信長の墓を
梅若丸を
擲る



あり鏡ヶ池のつらりを流芽が系と入り梅若丸の車法未洋
謡曲ありいん戯場文の板言綺語はゆるしめて其名をくわたり
傳へるゝとくも其心一き流はゆい糸は或人の曰梅若丸
人皇六十二代村上天皇の御宇を田少ぬ維房朝臣といひ一人の
云達ちりけおぬ維房和隆の群書うひゆく通詩
信長はまきこぬあり妻女はともみなく其妻柳乃局
う暇は一男子あり松若丸とて維房の妻若菜の若姫心ゆ
柳の方乃舞せらるゝと傳へ其子松若丸が世嗣とて人々を
眼をいふ小世しく失いむやと憂夜心は謀斗とてふりて下向せ
りぬい帝の勅命より陸奥國の役はまらるとして下向せ
るるを道にあらぬの星はゆりしがけ石の松若丸とて
えらふちきりをこゝろ一人の男子とておせせり是と梅若丸
若菜乃方心中いよく懐く秘すむとて人もあつたは
出さぬして結ぶ花は梅若丸の娘とて世に柳の局ををるを
松若丸といひ梅若丸に世と嗣せやると欺きたるは川柳の
局とてその方その中川はしうは心乃又とてうたふる若菜
乃若丸ありまこととて心熱ひまはくはるは又も悪斗を
懸け松若丸とて入りとて柳の局かくて我が



明福寺



山科及び東道は天津近松寺多の御のど

西光院

真言宗

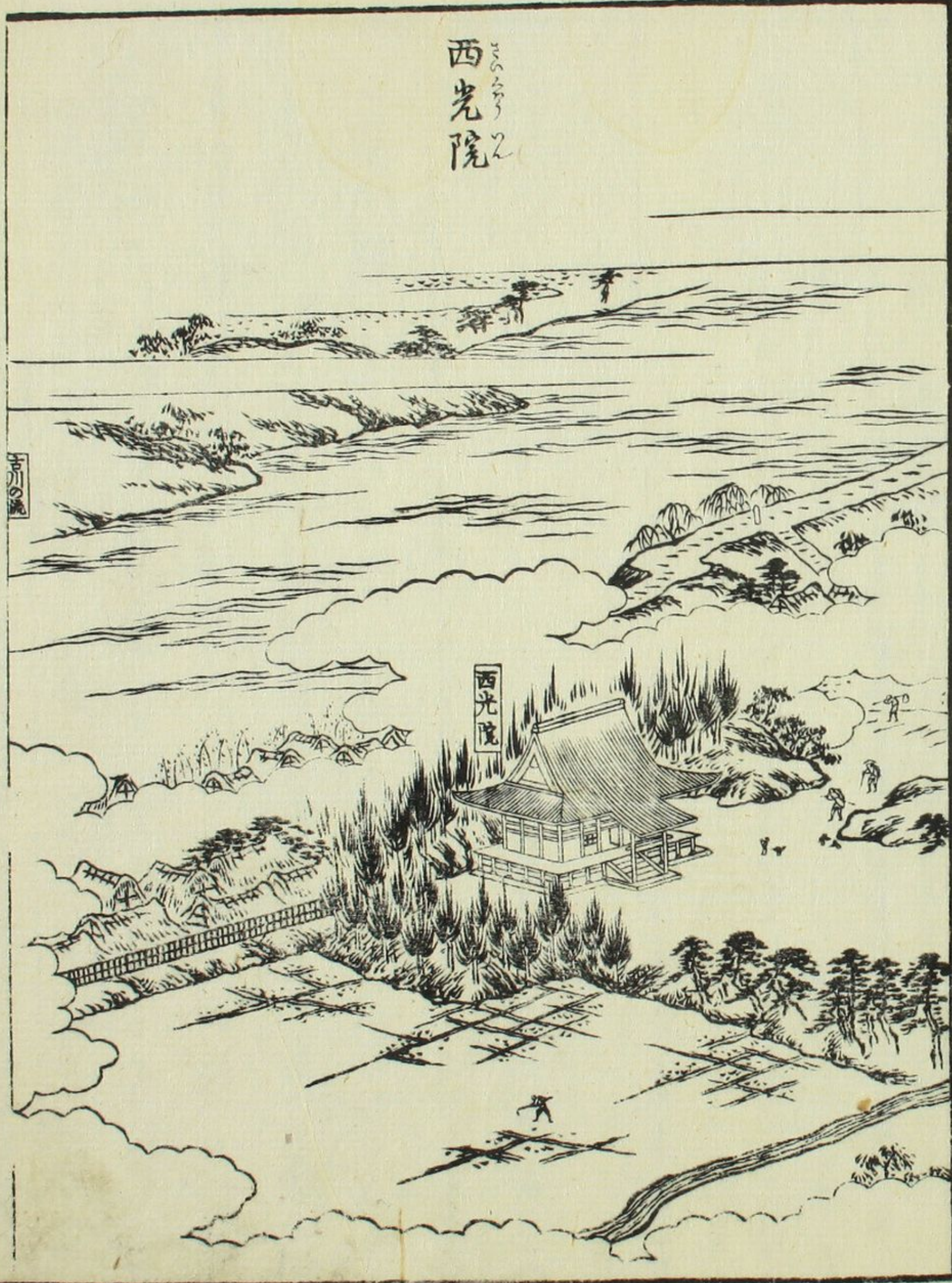
武深園二御年の内
本妻河内村より

当寺の境内に別堂ありおむく堂と名く高祖聖人の真像を安置せり毎月廿八日毎に開帳し香花焼明と修念佛以諸宗ともて群集し殊に祈禱と込る時の諸病と平癒し靈應實に彰るると諸人の信仰深きなり。傳曰当妙當園の神田といへる所に親鸞聖人の真弟西念坊一尊と建立ありて聖人御自他の真像并西念坊の本像と安置せり是と長明寺と号然る小第三世西念坊の代建武の乱に寺と破却せらるるに時西念の伯父西光院に任じあり二廻の本像と西光院へ持来り寺造の深田に埋隠せり奉を祇て世の中秘匿し居り以聖人の本像と埋隠し田地のむく

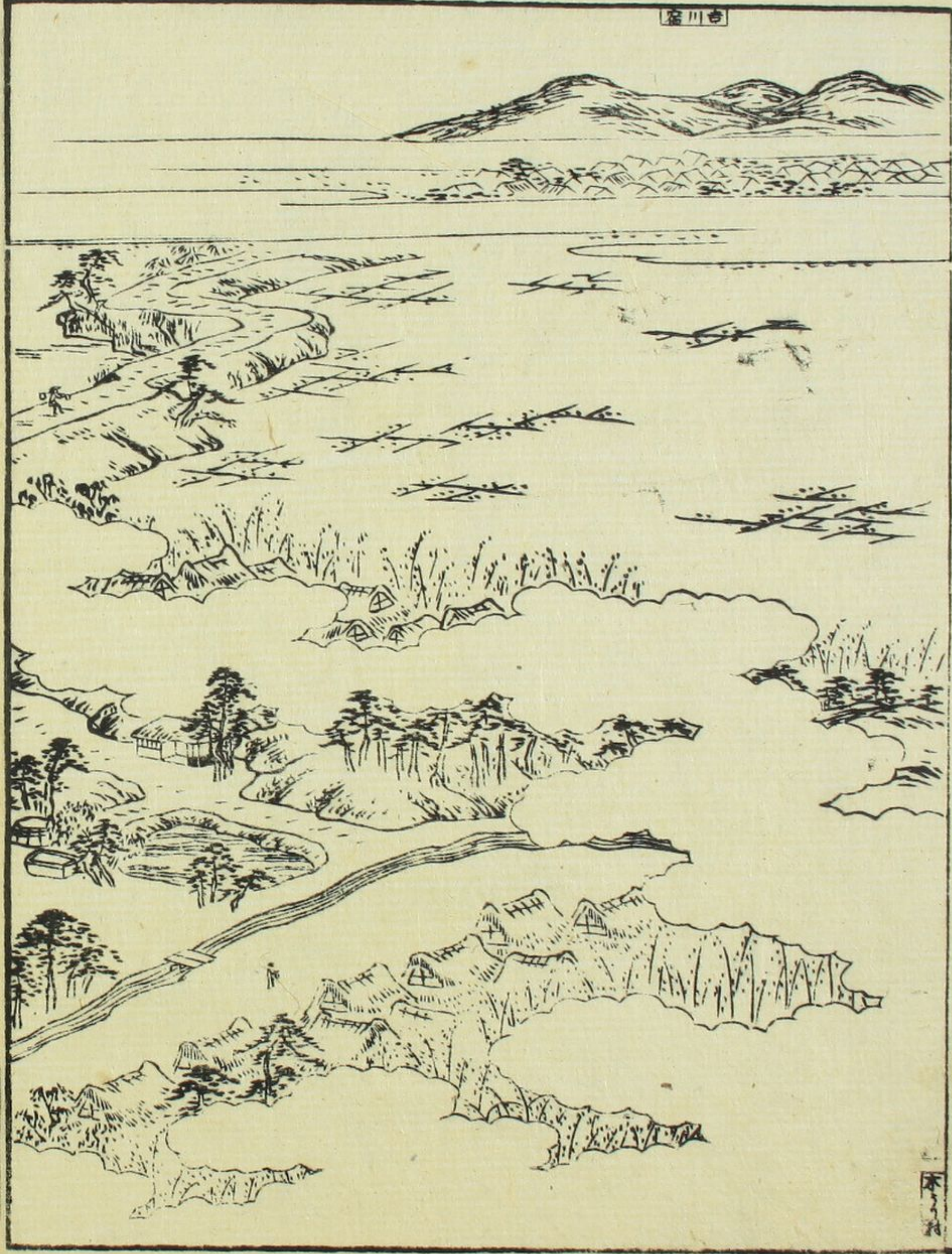
おむくの
真像



西光院



窪川寺



勤めきつるふぞ位信心篤き其地と掘てんれが二神の本像
靈社と現出給ふ滋又奇矣乃る像地中よりしりく
と取い進給ふあられど位唱へく是とおむくの像と稱
なほ其後建回長命寺并に世了順房信州より来ては
二纏の像と乞求むとくとも聖人の像ハ靈護に
はしくく諸人の信仰深きが灰燼にて是と返く文ハ
尚奪ふとめたてまつり西念坊乃像のくと長命寺え
くしとすとぞまへへ

○龍院の池と云ふはにッ谷と云ふ中村村後寺といふ澤上寺の
寺内よりあり江戸の市中又流る水石の水に池より流し出る
と云ふ池のめぐり又は楊柳様しく生ひく池のめぐりのまふく
いろろ早懸ふもけ池あつるまはしとくや寛永の辰菟草の
夫け池の邊りて午懸せし池の草又涌上り水面ハ其長三
丈半の暖地池といふ出け是州と尋人といふ其州の邊り

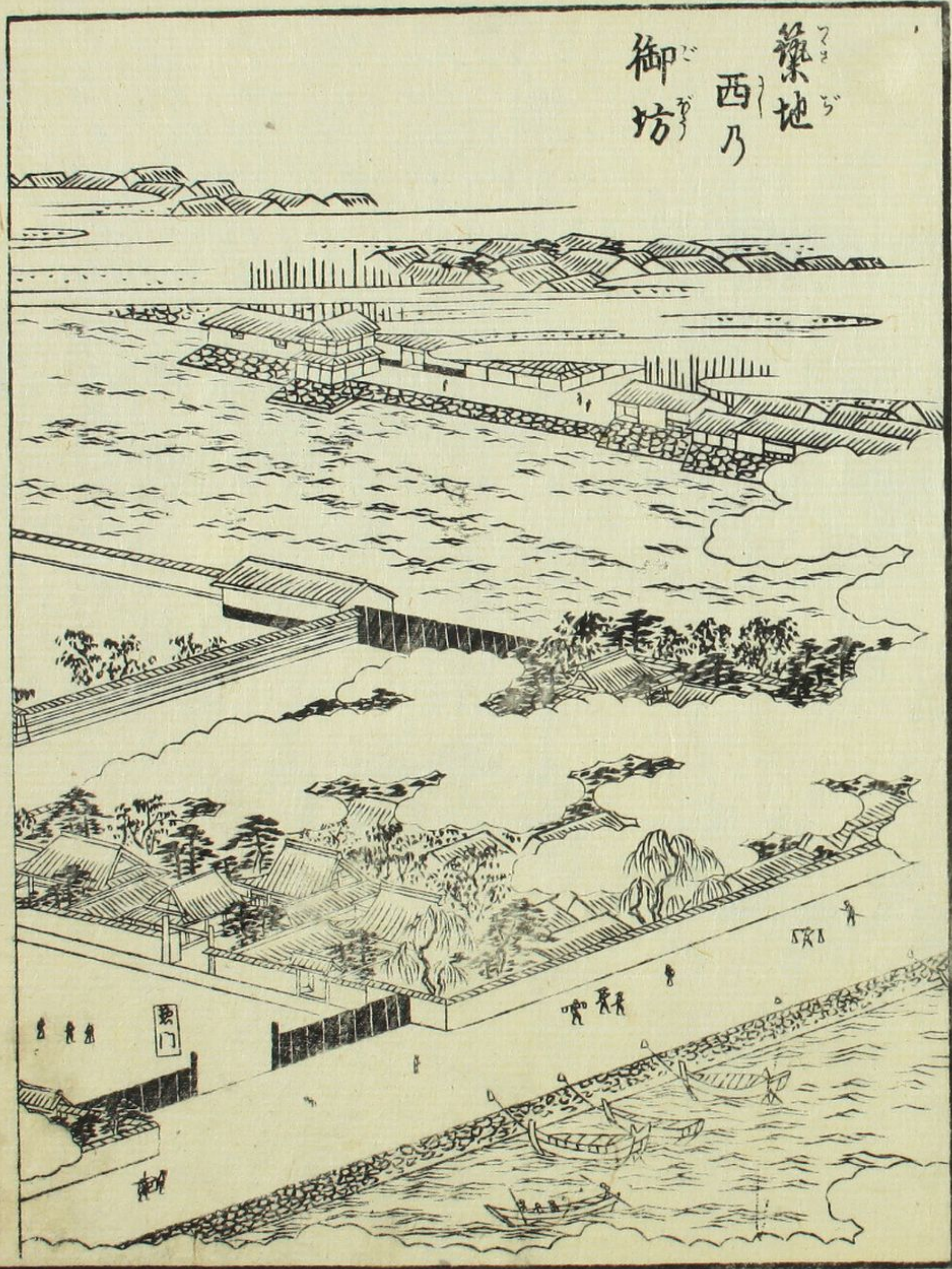
同まつて見るとはけり神をり龍院の大きき馬のりた大蛇と云
ふひのりハ八間さ一帯と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云
ふれい勢きまがう其州の利と云ふりかたらひ藤とらひま
其地と働きし後小大蛇の尻より烟のわたり三纏に強き切られ
ハ龍院の邊りてまへと云ふけ龍院といふけけけけけけけけけ
てや郷中の百姓三十人半むくり来り御衆くまをかんじ
ておませられはしり乃大蛇かき進給ふ水をまき何と云ふ
其州まはらうと云ふ命助しと云ふてまはらうと云ふと云ふ
おまされん同地恒死して死するも彼後地も急不とや傷け
らん池あつるまのまはらうと云ふ後し龍院の後命絶てその龍
池のまはらう里人多其骨と納り取ら高妻の町方へ投げ今その
家にあつたり

藤地御坊

本堂二十八間に面寛を子堂 熱門の内僧坊又十八ヶ寺

○藤地御坊ハ西本願寺御門法御坊所
す通りて藤地御門跡と云ふ

○極難井の井地とあり古き奇名不ると云ふ哉集後藤郷の歌
いさし井の極うの母いさしと云ふと云ふと云ふと云ふ



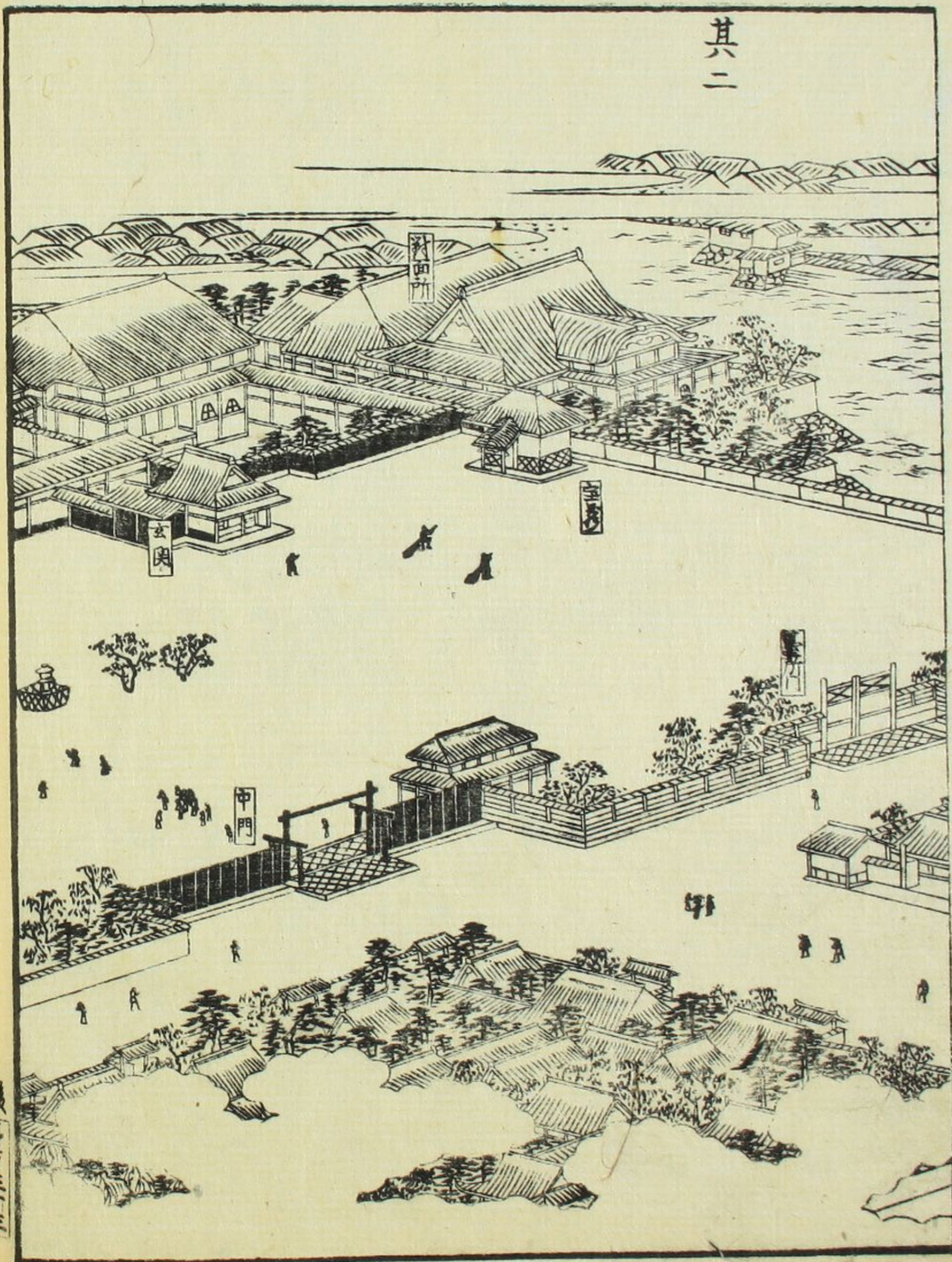
○富御堂の秋麗山魏くせくとして東國を冠なり京師
 本山より官僧と撰ひ富坊の論番なりし也

因東の宗派を提轄しとて門徒の輩をして宗法を守らしむ
 河門孫系存阿くせく入り富坊に入らせられ河門下の僧徒の
 中にも及び江府の麦畑隣園近村の老幼男女日くし群集し悲致
 渴仰の感涙は徒と後りぬ河門孫系東叡山増上寺等の河佛系に
 も亦後乃の孫魏魏として諸人目を驚し河通の道筋門徒
 の僧侶肩を推袖をつし孫孫の式実を致し孫同山聖人河在世
 滅どるるなり諸侯方の使者車馬門者も群連して市をる
 且河法より河修なりし孫入其ありさまの嚴なる後どは
 語なり

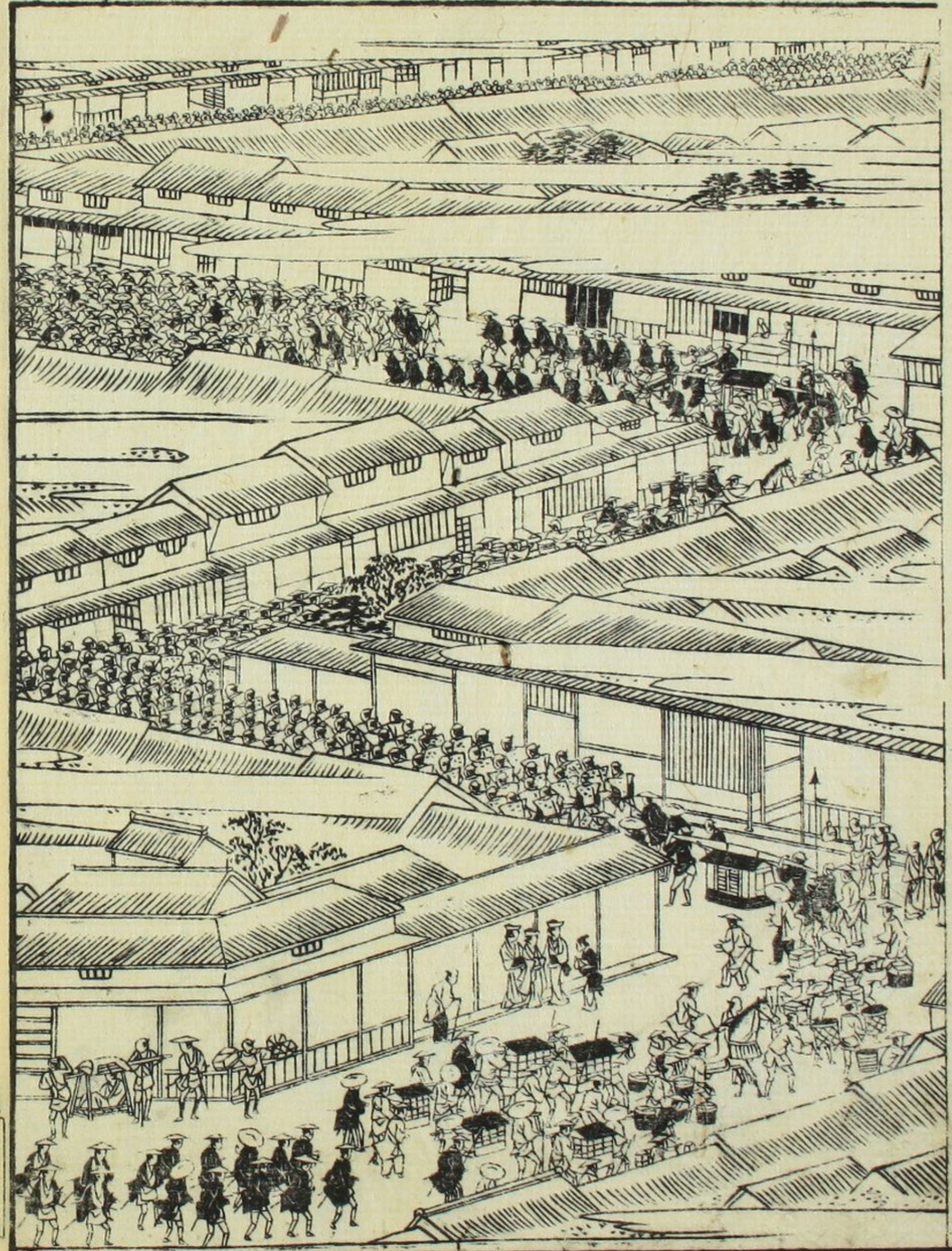
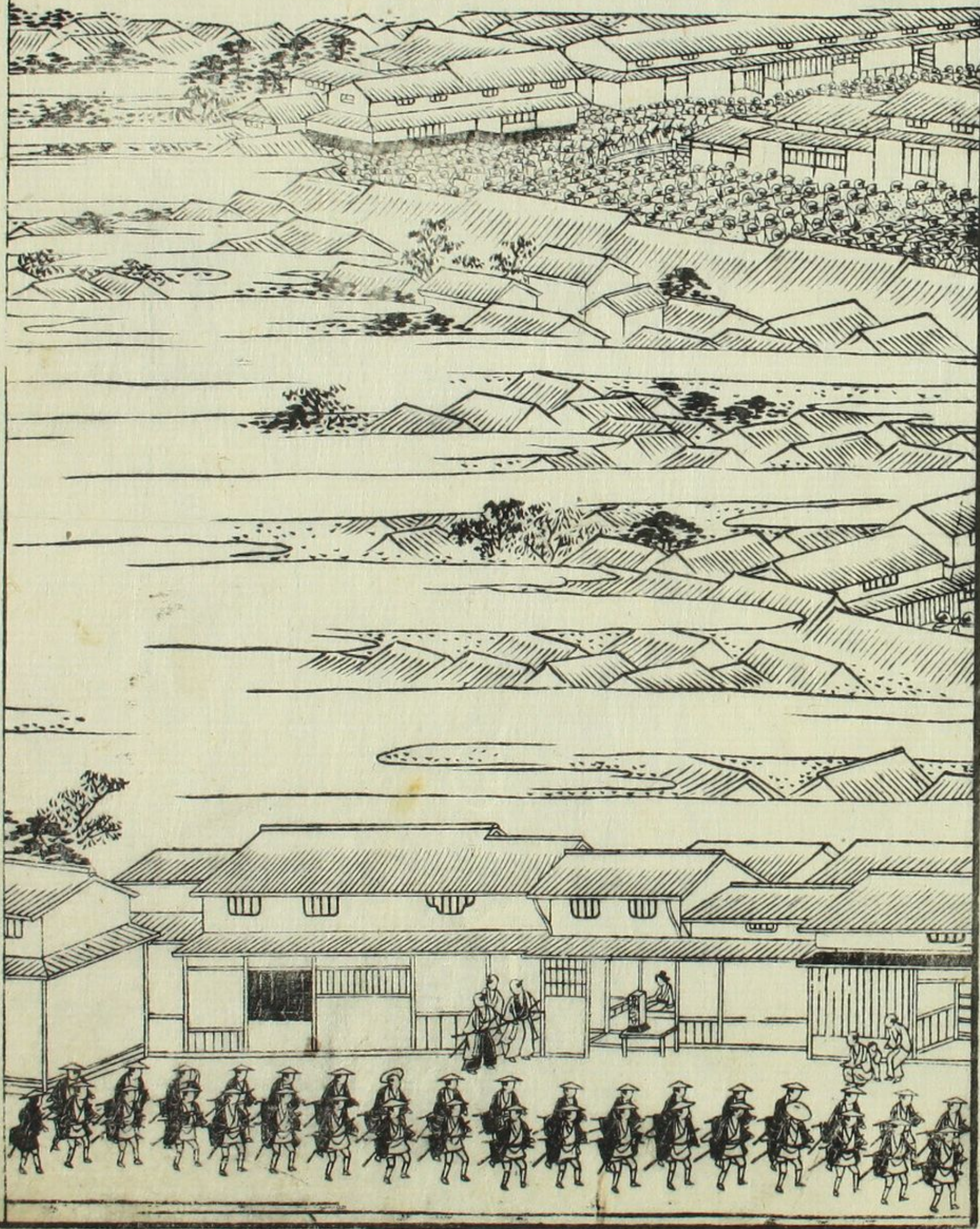
○三塚山僧上寺の其に在るは隆平公の一人皇百一代後小松院の御
 高祖聖人河修なり源法師の裔なり

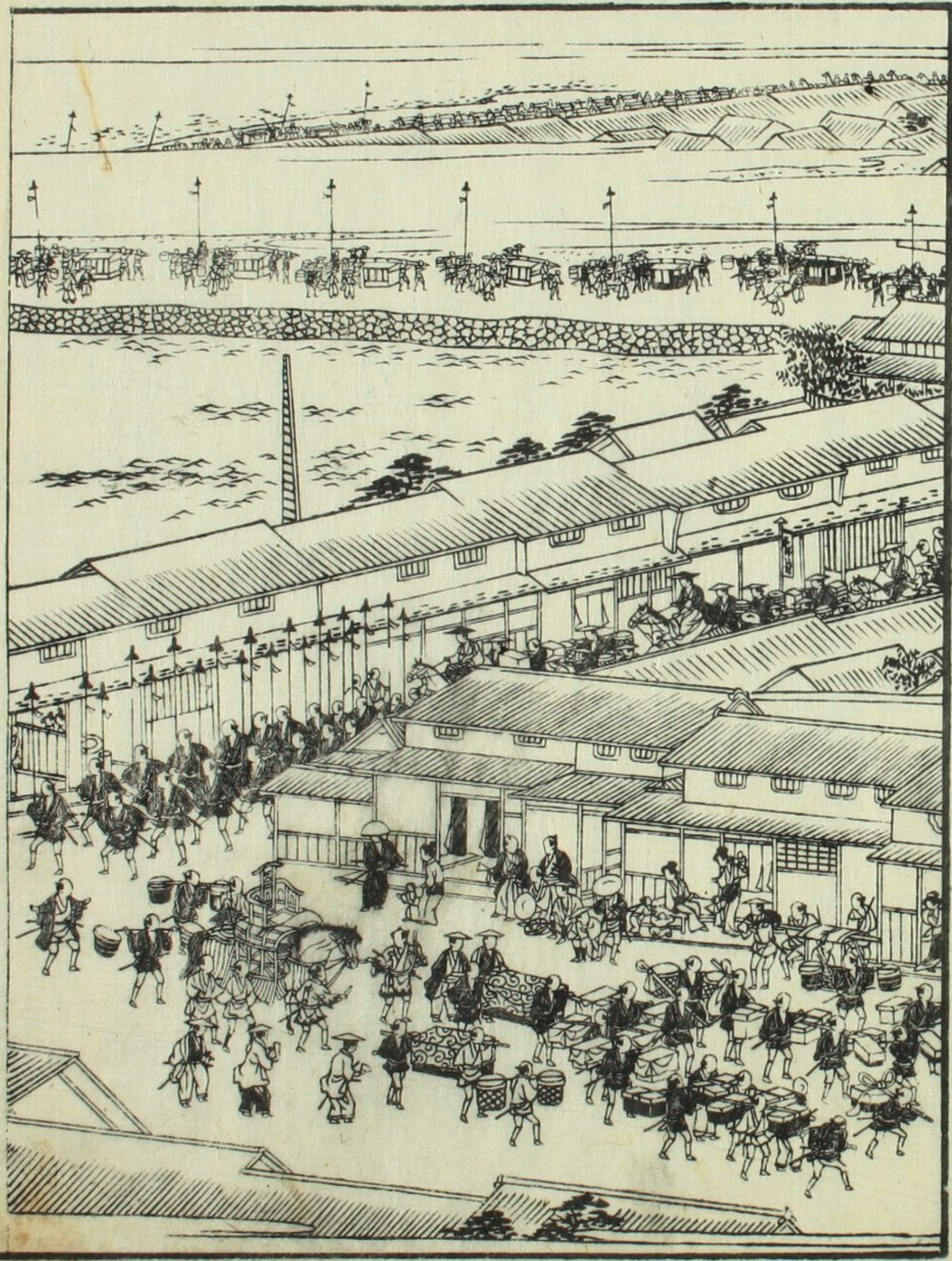


其二

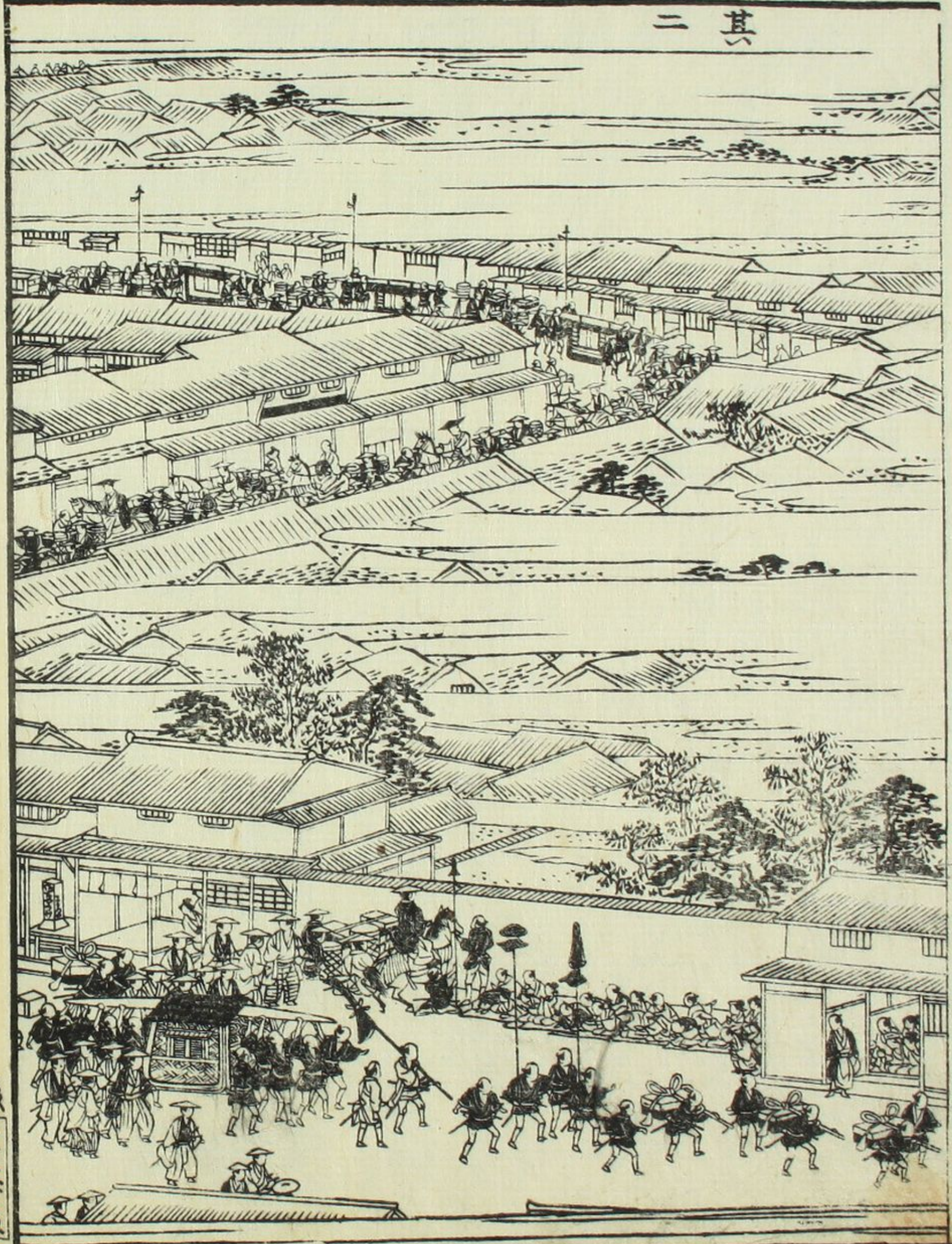


江戸門より通るの町の図





二其



後三年五

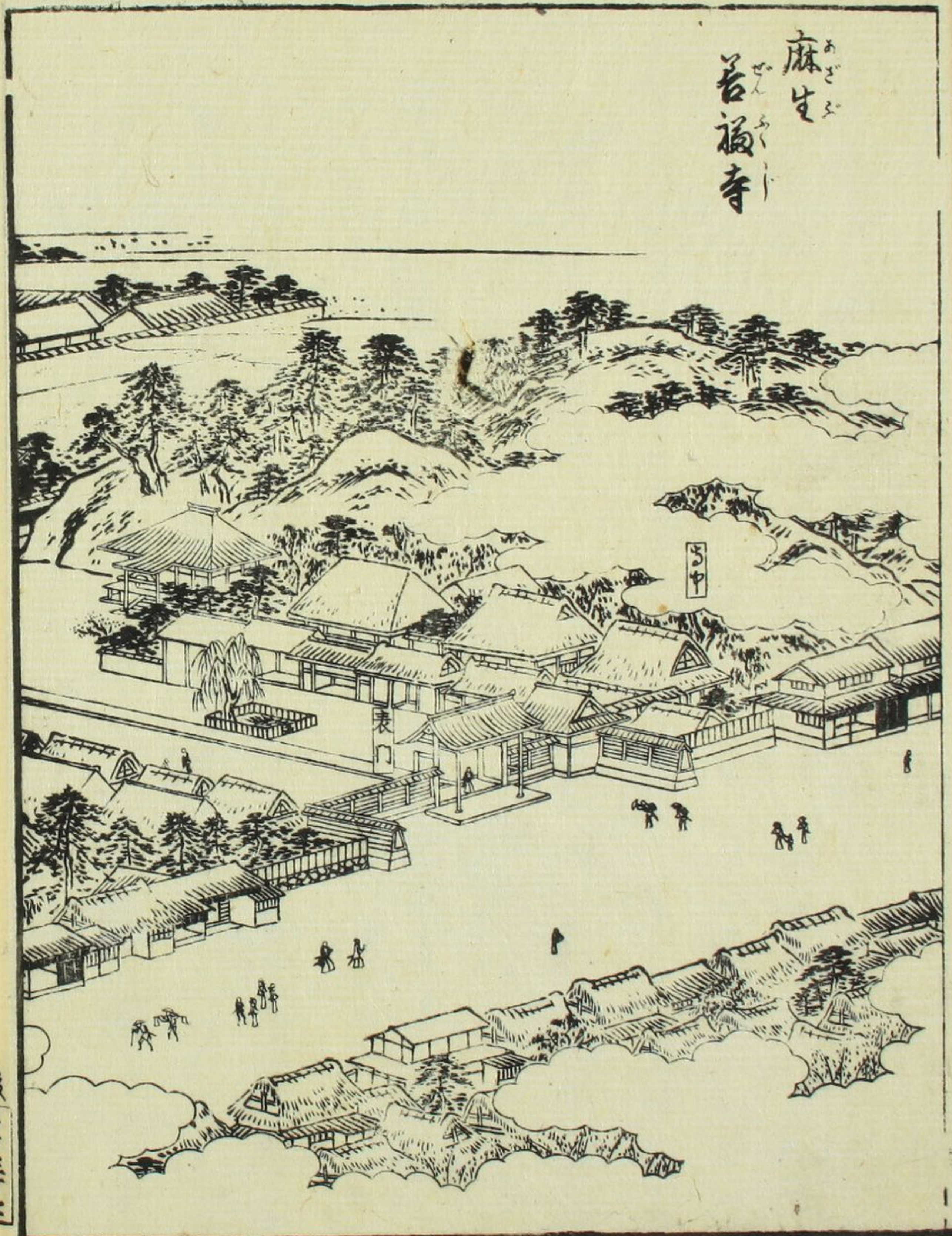
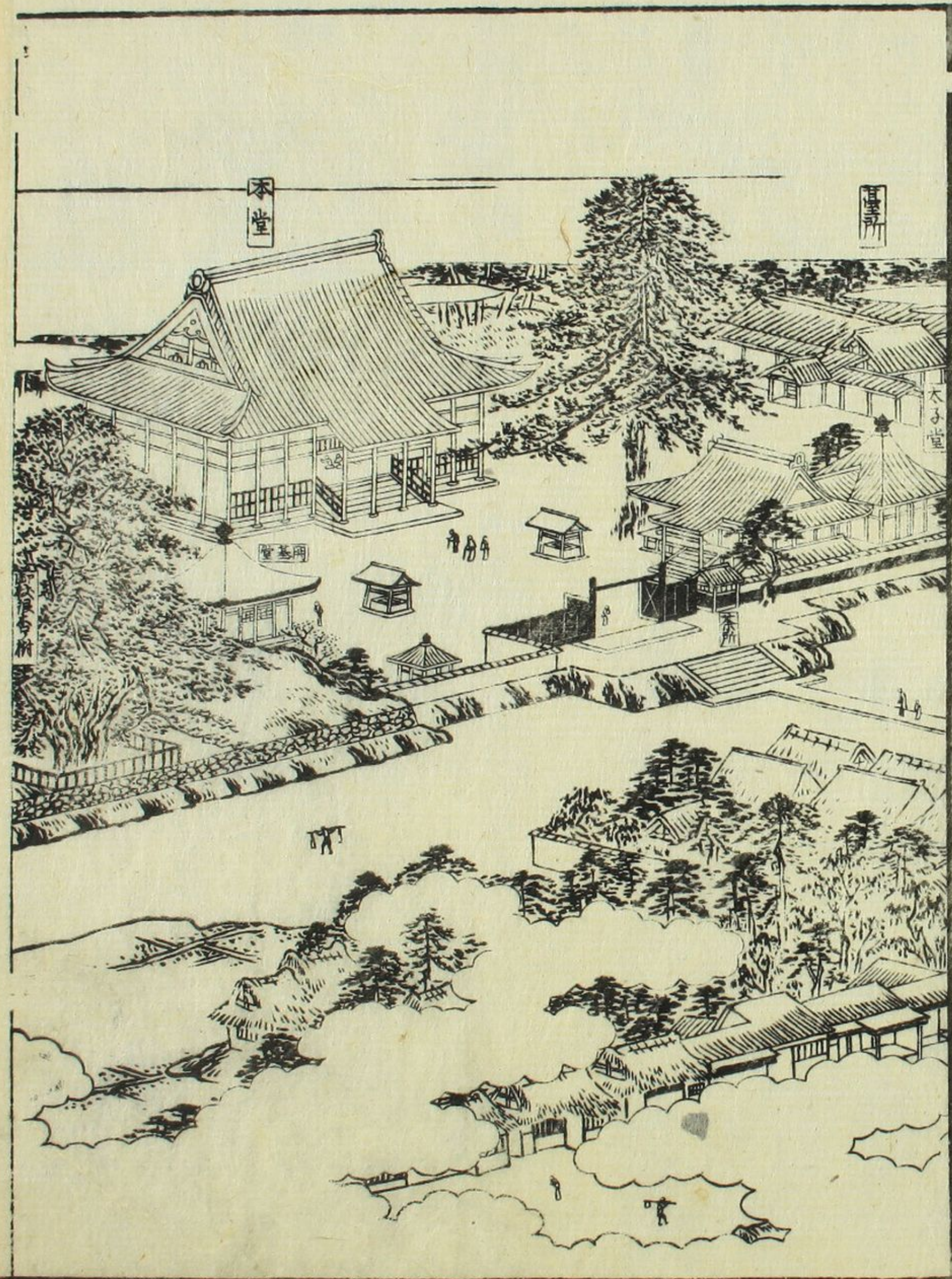
玄劍用基の西邊上人園東十八ヶ寺檀林の惣本寺之ありし
中絶せしめり満願寺の系傳市に下し七堂を以て堂々を構合根
と撰り庭前以寺中坊舎三千四ヶ寺不化の寮教百箇天下を以て乃
靈場なり

龜子山菩提寺

西流 江戸麻布あり

龜子山菩提寺の園東七靈場乃陸一ヶく聖人真身六
老僧の弟六了海碩徳の遺法之本堂本為阿彌陀如來
惠心僧都 用基堂 了海上人の 坊舎十三區廣庭より大なる銀杏樹
あり出院乃境内廣大ありと殊さら繁茂第一の地なり
を豪家より商教百軒薨を並建連せしけ造りて出寺
乃領地なりともなり。支出山の用祖了海上人とつる
其俗姓んをうけ鳥羽院の苗裔老長信實公の息男
かり信實公東海に放たれ民間よりりて武苑の幽邃み

ありて奉と経終る一子なきを憂て苑王権現祈誓
一七日乃丹誠を抽どり小其妻室夏より白布と吞じと
看く即ち懐望せり竟る延應元年六月十八日
一男子を産り名けて松若と稱せり七歳の時夏の若く
よめく実相寺龍賢律師乃許しりて出家しりんり
を教ふ龍賢け児を教示修學せしめり名と了海と
をとりけ了海博識多才ありと三密瑜伽の妙法
又通達せり又叡山に登り靜業僧都と作しに教團
融の理と亮の中道実相の觀を明らり其後故郷に
降りて又母の年 齡よりやく押し海に値りて
よめくい実よりまらしめんとんあまよめりて海
弘興の基趾を求めんがため藏王権現乃社祠に



了海 碩徳 義王 権現 の 威ありて 菩提の 基立に



後三十八

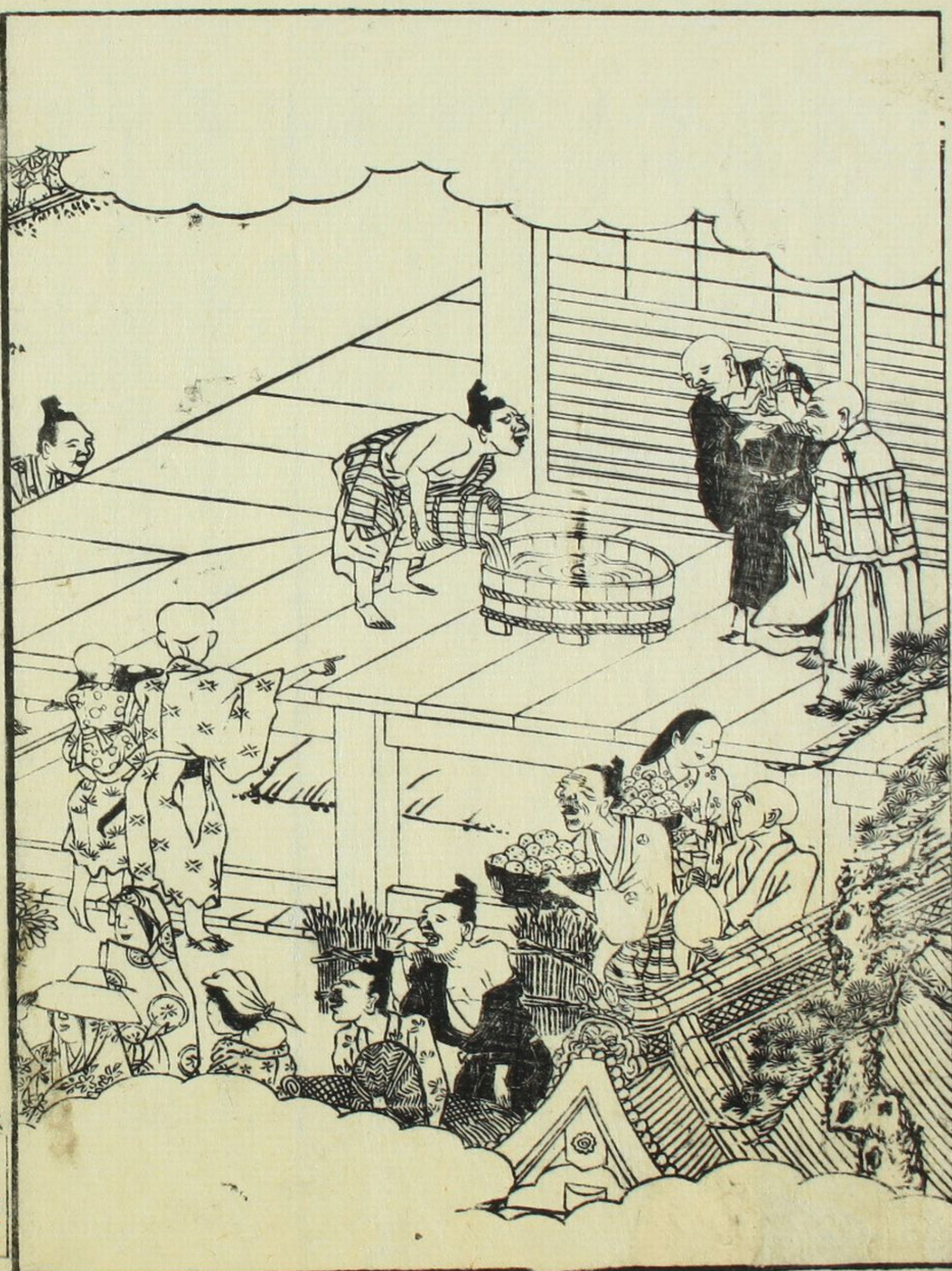
流くこれ祈る不思議や天より白幡降下す
 木の梢に掛り了海其と後より見ら小一宇乃古
 院あり今の菩提寺干時一人の老翁忽ち此を告て曰く
 何了海汝と然る年久しくは精舎を弘法大師開闢
 何る不^レレ真言密乗の勝區之今幸又住持とる若
 は^レ休け院止り有縁の法を求めて末代弘法せよ必
 濁世海度の知識は値り何ん予ん是年尼の愛他義王
 菩薩ありとて立去終ひぬ了海大に悦ひ即ち寺に
 徹し朝夕法を講ずるなり乃ち義王菩薩の御示し
 末代の要法を弘通ある知識何人々あり今とい
 ぬ日を送りけるが爰は高祖聖人の教化都鄙は普
 く濁世末代の菩提知識ありを授けし聖人は濁

弘法の様と試んと既又聖人又湯もろなり即高祖聖
人又向ひ三密加持くわく即止觀しくわんの法とて同雅どうがなり小聖
人善ぜん後ごの郷音きょうおんの善ぜん又應おうとてし漸深せん理りの説せつ又及
て曰く修しゆつつふ不滅ふめつなるし心蓮しんれん心月しんげつ一念三千高かうききのん
多たるるも濁世じやくせい末代まつだいの衆生しゆじやうこれを修しゆつつふの修しゆつつふに
戒かい五道ごどうの僧俗そうじやく是と觀くわんとりの機きあるはしし志しるるふ今いま終
院じゆん世せいの本釈ほんしやく地ぢの念佛ねんぶつの真宗まんとしゆの末世まつせい相應さうおんの要法ようぽうしして
凡おん夫ふ直入ぢくじやくの真教まんけう之是則釋迦しやくた出世しうせの本懐ほんくわい終しゆう弘かう教けうの
密みつなるは汝なんぢとと思惟しゆいせよとと嚴げんに説せつせせ終しゆうひひたたるる海うみ忽とつ
と一念いつげん發はつ起き即聖人じやくせいじんを辭ことばししなりなりるる重ちゆう偈ぎ仰おほははしし降かう舟しゆうしゆと
約やくして日にち疾やく圓えん法ぽうの益やくと夢むなりなり信心しんじん飲いん納なつせせししややとと
ききされらば了りやう海うみ身みと終しゆうるるまでけけ靈れい場じやう若福なりなり真宗まんとしゆとと弘かう

後三年九

法ぽうととるるのの意いなりなりははしし○佛光ぶつこう寺じ実じつ縁えんとと曰い了海りやうかい上人じやうじん元應
二年に庚申こうしん正月しげつ廿八日にじゅうはちにちの十二歳じふにさいなりなりるる歳さいに武花ぶけ園えん阿あ佐さ布ふ
若福わくふく寺じと号ごう以延應元年えんおんげん誕生たうじん二十にじゅうに歳さいの時とき祖師そし因いん寂じやく
○高祖かうそ滅めつ後ご十六年じゅうろくにん弘安元年かうあんげんに十歳じゅうさいのの以真いしん心しん寺じに入いれ
第だいに世せいの寺じ勢せいととあり永仁えいじ又また年ねん親おん念ねん誓せ海うみ又また寺じ勢せいとと後
武州ぶしゅう麻布まふ又また下した依よは時又元應二年げんおんにんの春はる正月しげつ化縁けえんの勤きんつつきて
廿八日にじゅうはちにち即すなはち生なま後念ごねんの素懐そくわいと遂すい法ぽうひひたりたり○了海りやうかい
自みづか他たの像ざうと開基かいき堂だう又また安あん室しつに毎年まいねん十一月じゅういちがつ三日さんびつ又また新しん發はつ誓せ盤ばんと
け像ざうを入いれ湯たうととて洗せんひひ再またびび本ほん體たい又また居ゐるる長ちやう祿りやく院いん經きやうと浸せん漏ろう
し系けい流りゆうの諸人しよじん又また赤飯せつはん湯酒たうしゆととて廣ひろ庭ていととて相さう撲ぼくととししむ
先ま了りやう海うみ上人じやうじんの送しやう云いとと云い○都みやこて麻布まふ七郷しちきやうの町まちににけ了海りやうかい堂だうと修しゆ補ぼ
○享保かうぼの記きは高祖かうそ聖人せいじん南なん國こく妙めう化けのの了海りやうかい寺じ

豆
子
寺
角
乃
圖



後
四
十

入海乃子海坊聖人又依一々所并子とあり聖人又了
 海乃枝を得く家ととまり弘法行々せ終ひ所枝の本と
 地とに終ひつる小山根報言 道と生枝系に方又布衣と老本と
 あり今又夜在了海永仁二甲年中冬上旬第六日寂せり
建仁元年辛酉 杯種十八日お生え 筆記せり遠跡孫又是と心し一々享保記誤後
 とく佛光寺の記録とせ流とせり私と抄へらく出院
 寺説のどく用基堂の廢屋又根杏樹あり是聖人のと
 終ふ所枝の生しつるゆ世と終一人とぞ門と是と稱後以
 統る所の享保記といふとく聖人け院又入所終ふ所の
 強ら誤説ともなるゆ終えり了海上人の年齢八歳
 の年曆佛光寺の記録と大異なりいづとも是なりと
 せん後學これを記せ ○什宝聖徳皇の所本像所自地

八字の名号等を安ん

○泉岳寺の芝多論は曹洞宗の府三ヶ寺の内用基門庵和尚寺
 又義士四十七人の廟堂あり
 ○日本橋の都乃月館とせをて諸方への終終といふなり是れ上
 より西の方なる小護河の石二の峯と久ぬ系橋の上より海の上の
 堂山門も芝多川橋を経て合枝橋芝橋の是よりたの方海辺
 橋は又細きを曳き奥を延びて芝多峯と稱ははるより石川
 あり同右の方又八橋の社あり渡辺綱が守りての靈神ありと保奉
 中は不に勤法せりといふ一系一系像の大佛阿彌堂如來堂を堂
 皆右の方あり芝乃平町より石川はまた多論港といふ海邊あり
 遙く海系川泳つやまの船橋の森下橋本房の海邊相州種會の
 沖も入まじり船系泳といつ方は沖の漁舟と起くふむしや後の方
 久くは後なる後も及ぶは毎年三月三日は沖の波するは昔は
 恒右の瀬もまたまじり里の童を干ばはたげ貝拾ふさまあり
 石川橋の名町といふより箱根山も芝多橋を渡り金川の沢あり
 石川海邊右の徳建持現の社は又人宛あり種倉の軍家御影
 田邊をてい人宛と標しし終るゆ終るは又久より是をいふとく

